

金子 貴昭 (立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー)

E-mail tkaneko@fc.ritsumei.ac.jp

はじめに

筆者は、板木を研究資源として観察し、板本だけを見ても分かり得なかった事象を事例として蓄積して、板本書誌学に還元する「板本書誌学」という方法論を提唱している⁽¹⁾。そうすることにより、従来よりも豊かな視点で板本に接することができ、新たな板本観察手法が見出される可能性もあると考えられるからである。

例えば、たった一枚の板木が現存するだけで、その本全体の板木の構成がおよそ明らかになり、目前の板本がなぜそのような姿をしているのか、理解に役立つ場合がある。永井一彰氏による寛政元年(一七八九)刊『おくのほそ道』についての考証がその好例である⁽²⁾。永井氏は寛政元年版の諸本中、本来は本文末尾に来るべき「蛤のふたみに別行く秋そ」の句が表紙見返しに来ている「蛤本」を取り上げられ、現存する一枚の板木を手がかりに『おくのほそ道』の全体の板木構成を想定された上で、それが乱丁の一種だったことを指摘されている。筆者も、板木が全揃いで現存する宝暦十年(一七六〇)刊『賞奇軒墨竹譜』を例に、板木の構

要旨

板木がどのように仕立てられていたかを知ることで、目前の板本がなぜそのような姿をしているのか、理解できる場合がある。そのためには、その板本の板木が何丁張だったのかを知る必要があるが、該当の板木が現存する例は稀であり、推定に拠らざるを得ない場合が多いだろう。本稿は、現存する板木と板本を対照しつつ、一点の板本に含まれる複数紙質の出現パターンおよび匡郭縦寸の高低差パターンに着目し、板本から板木の構成を推定する板本観察手法を提示する。

abstract

Sometimes we can understand why a printed book is bound in an irregular order by analyzing the structures of the printing blocks that were used to print the book. To be able to that, it is essential to know how many chō (sheets) the printing block consisted of, but since only a limited number of printing blocks has survived it might be a difficult study. This article suggests that the investigation of the appearance of the paper as well as that of the height of the kyōkaku (the printed frame on the sheet) might help us to reveal what kind of printing block was actually used.

成が板本の姿に影響を与えた事例を報告したことがある。⁽³⁾

こうした調査は、板木が一枚でも現存していなければできないことなのだろうか。例えば木村三四吾氏は「古版『冬の日』諸本の幾つか」および貞享三年刊『春の日』（寺田重徳板、天理大学附属図書館綿屋文庫所蔵）について、丁によって墨色が少し異なることを指摘され、それらの板木が「一丁二頁を一面とする版板であった」ことを推定されている。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

この他、筆者が気付いた範囲では、例えば一点の板本において、丁ごとに異なる彫り方の句点が混在する例がある。享保三年（一七一八）刊の伊賀屋勘右衛門板『八百やお七恋桜』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵、4-13261-1）はこの例に該当するが、区点を黒丸点で示すのは、「一」〜「十二」、「十五」、「十七」〜「二十」、「二十三」〜「二十四」、「二十七」〜「三十一」、「三十三」丁、中抜ききの白丸点で示すのが「十三」〜「十四」、「十六」、「二十一」〜「二十二」、「二十五」〜「二十六」、「三十二」、「三十四」〜「三十七」丁と、区点の彫り方の異なりが明確に表れる（図1）。

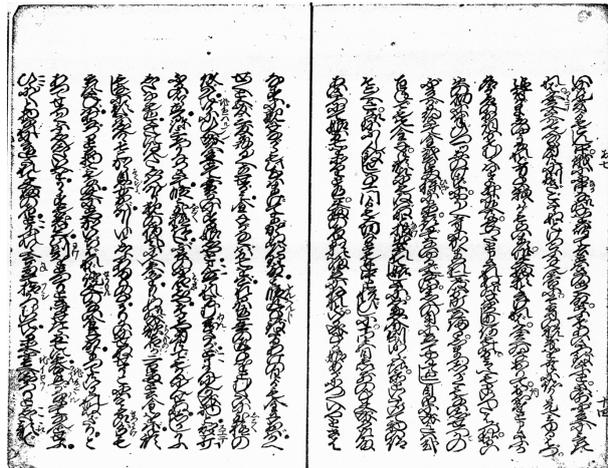


図1 伊賀屋勘右衛門板『八百やお七恋桜』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）十四ウ（白丸点）～十五オ（黒丸点）

その原因は、該書の板木の調製を担当した彫師が複数人存在し、担当の彫師によって句点の彫り方に差が出た、というあたりを求めるべきであるうか。結局、この区点の相違だけを根拠に、該書

の板木の仕立てられ方を確定することは難しいが、「二十一」〜「二十二」丁（白丸）、「二十三」〜「二十四」丁（黒丸）、「二十五」〜「二十六」丁（白丸）あたりの連続する2丁分をまとまりとするパターンに着目すれば、該書の板木が二丁張の板木で仕立てられていたと見ることができ。また、白丸の「十六」丁と「三十二」丁は同じ板に彫られ、黒丸の「十五」丁は「二十七」〜「三十一」丁（5丁分）のいずれか1丁、もしくは「三十三」と同じ板に彫られ、残りの黒丸1丁と奥付が同じ板に彫られていたか、と推定することは許されるだろう。同様の事例で2丁や4丁のパターンを見事に出現させる例はないか、今後の留意が必要である。

これらの例を見れば、板木が現存しない場合においても、板木がどのように仕立てられていたかを知る手がかりが、まだ板本のどこかに隠れているのではないかと思われる。筆者は拙稿において、明治二年（一八六九）刊『暢寄帖』を例に、一点の板本に含まれる紙質の異なりが、板木の異なりを示すのではないか、という試論を提示しておいた。⁽⁷⁾ 本稿では、この紙質の問題を再検討する他、匡郭の高低差に着目し、板本の様相から板木の構成を想定する方法を試みる。

1 混在する紙質の出現パターンと板木の構成

—立命館大学アート・リサーチセンター所蔵

『和歌籠の塵』を例に—

『暢寄帖』のように、一点の板本に異なる複数種の紙質が混在することとは、さほど珍しくない。特に近代摺の板本には、こうした例を多く見かける。板本を観察する立場からは、紙質の統一が取れていない杜撰な造本である、と思われるかもしれないが、紙質の混在は、やはり4や2

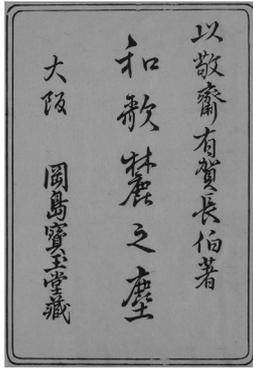


図3 底本 上册表紙見返し

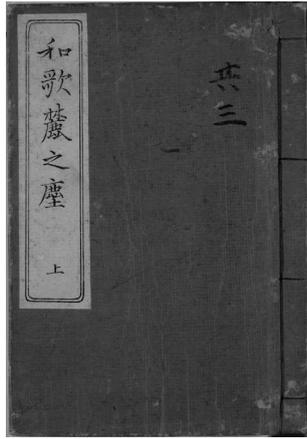


図2 底本 上册表紙



図4 底本 下册裏表紙見返し

「日本古典籍総合目録」⁸⁾によれば、『和歌麿の塵』の初版は寛政十二年

の単位で起こることが多い。「板木」という視点から板本を観察する時、ほとんどの板本が四丁張や二丁張の板木で摺刷されたものであるということと無関係には思われないのである。

以下、本節では四種の紙質が混在している立命館大学アート・リサーチセンター（以下、立命館ARC）所蔵『和歌麿の塵』（arcBK03-0091、中本3冊、近代摺。以下、本節では底本と呼ぶ。）を例に、紙質の混在の有様を検討してみる。

底本は、原題簽「和歌麿之塵 上」「和歌麿之塵 中」「和歌麿之塵 下」（図2）。刊行年は記載されない。上册の表紙見返しに「大阪 岡島宝玉堂」（図3）、下册裏表紙見返しの蔵板目録に「大阪書林 本町通心斎橋東へ入 河内屋真七」とある（図4）。

（一八〇〇、ただし享和元年の序あり）で、他には文化四年版・弘化二年版・元治元年版があるが、底本は上述の諸版のうち、弘化二年版（以下、弘化版。立命館ARC所蔵、arcBK03-0105を使用）・元治元年版（以下、元治版。架蔵本を使用）と一致する。つまり、それらの近代摺である。

該書の板本は五枚が現存するが、卷之上「七七」～「八十」丁までを収める一枚（N0151、奈良大学博物館所蔵、藤井文政堂旧蔵）が底本と一致する。「七八」丁を例に示すと、「もみちの錦吹たて、」の「の」の内部にある点状の彫り残しが板木・底本・弘化版・元治版に見られるのに対し、寛政十二年版（以下、寛政版。立命館ARC所蔵、arcBK03-0100を使用）にはこの彫り残しが見られない。板木の浅いที่ไม่十分である点も同様である（図5～9）。卷之下「三八」～「四一」丁を収めるT2565、卷之下「百九三」～「百九六終」丁を収めるT2565、題簽の板木（T1516）・袋の板木（T2322）の四枚（いずれも竹苞書楼旧蔵）は底本に一致しない。

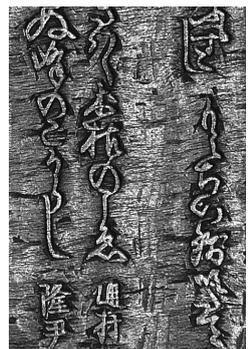


図5 板木(部分、鏡像、奈良大学博物館所蔵)

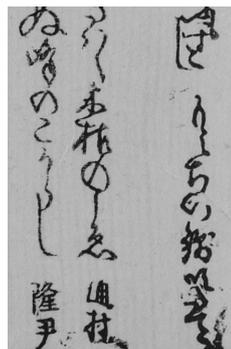


図6 底本

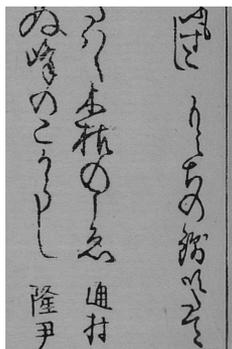


図7 弘化版

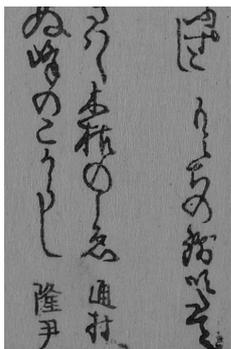


図8 元治版

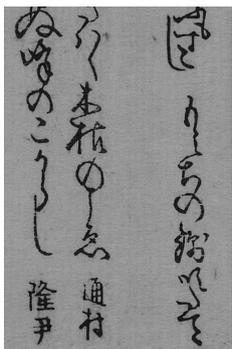
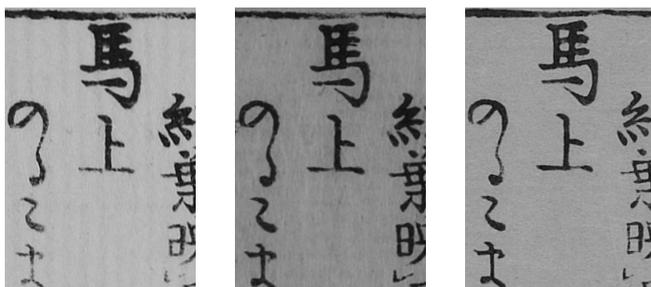


図9 寛政版

T2563「百九十六終」丁の「馬上」の「馬」を板本と比較すると、板木と寛政版が一致するのに対し、弘化版・元治版は明らかに字体を異にする(図10～14)。したがって本文の板木については、竹苞書楼旧蔵の板木は寛政版のものである。



[上段右] 図10 板木(部分、鏡像、奈良大学博物館所蔵)
 [上段左] 図11 寛政版
 [下段右] 図12 弘化版
 [下段中央] 図13 元治版
 [下段左] 図14 底本

紙質の異なりは、色・繊維の荒さなどで判断することができる。必ずしも図版で明示できないが、図15を見れば全く色が異なる紙質が底本に混在していることが分かる。

次に底本に含まれる四種の紙質をそれぞれA B C D種として、その出現パターンを【表1】に示す。なお底本は乱丁により、巻之上「七七」「七八」丁の丁順が入れ替わる他、巻之下「七六」「七六」丁が同巻「七二」と「七三」丁の間に入る。巻之下「九」丁は欠丁である。

この表を見ると、紙質がまばらに出現する箇所も見られるが、多くの場合、出現パターンは4の倍数を基調として表れている。特徴を捉えやすいのは中冊から下冊にわたる下巻「七六」～「百十八」丁であり、4丁ごとに目まぐるしく紙質を異にしている。また、この箇所以外であっても、例えばC種が連続して表れる上巻「二」～「一六」(16丁分)、同じくC種が連続する下巻「二九」～「四八」(20丁分)なども、4丁の単位を基調としている。N0151が収める上巻「七七」～「八十」丁は、前後の丁と紙質が連続せず、この4丁分のみA種となっている。これらの特徴から考えれば、複数の紙質の混在が4丁の単位を基調として起こっていることと、現存する底本の板木が4丁張であることとの間には、相関関係が認められるだろう。つまり、紙質の混在状況は、底本の板木が4丁張であることを示している。

しかし、4丁の単位が崩れている例も散見される。【表1】に戻る。上巻は本文「一」丁以降の紙質出現パターンやN0151に含まれる「七七」～「八十」のパターンから判断して、本文冒頭から四丁ずつ板木に収めていったように思われる。「一」～「三六」丁まではそのように理解できるが、上巻「三七」～「四四」丁などは、紙質が1～2丁の単位で混在しており、板木の構成を抽出することができない。また、上巻「六九」丁はC種であり、4丁の単位で捉えた場合、「七十」～「七二」丁の3丁分と同種の紙質であってほしいところであるが、この3丁分はB種で摺られている。

先ほど特徴的と述べた箇所には、紙質の出現パターンが2丁の単位で表れているところが一箇所ある。下巻「八五」～「八六」丁がそれである。この2丁は中冊の末尾にあたる丁であり、板木を仕立てる上では半端になり得る丁である。つまり、どこか別の半端になった丁と組み合わせられた可能性を想定したいところであるが、実際の組み合わせを想定す

冊	卷	丁	紙質
中	下	六二	C
中	下	六三	C
中	下	六四	C
中	下	六五	C
中	下	六六	C
中	下	六七	C
中	下	六八	C
中	下	六九	C
中	下	七十	C
中	下	七一	C
中	下	七二	C
中	下	七六	A
中	下	七三	A
中	下	七四	A
中	下	七五	A
中	下	七七	C
中	下	七八	C
中	下	七九	C
中	下	八十	C
中	下	八一	B
中	下	八二	B
中	下	八三	B
中	下	八四	B
中	下	八五	C
中	下	八六	C
下	下	八七	A
下	下	八八	A
下	下	八九	A
下	下	九十	A
下	下	九一	B
下	下	九二	B
下	下	九三	B
下	下	九四	B
下	下	九五	C
下	下	九六	C
下	下	九七	C
下	下	九八	C
下	下	九九	C
下	下	百	C
下	下	百一	C
下	下	百二	C
下	下	百三	B
下	下	百四	B
下	下	百五	B
下	下	百六	B
下	下	百七	D
下	下	百八	D
下	下	百九	D
下	下	百十	D
下	下	百十一	C
下	下	百十二	C
下	下	百十三	C
下	下	百十四	C
下	下	百十五	D
下	下	百十六	D
下	下	百十七	D
下	下	百十八	D

冊	卷	丁	紙質
中	下	四	C
中	下	五	C
中	下	六	C
中	下	七	C
中	下	八	C
中	下	十	C
中	下	十一	C
中	下	十二	B
中	下	十三	C
中	下	十四	C
中	下	十五	C
中	下	十六	C
中	下	十七	B
中	下	十八	B
中	下	十九	B
中	下	二十	B
中	下	二一	C
中	下	二二	C
中	下	二三	C
中	下	二四	C
中	下	二五	B
中	下	二六	B
中	下	二七	B
中	下	二八	B
中	下	二九	C
中	下	三十	C
中	下	三一	C
中	下	三二	C
中	下	三三	C
中	下	三四	C
中	下	三五	C
中	下	三六	C
中	下	三七	C
中	下	三八	C
中	下	三九	C
中	下	四十	C
中	下	四一	C
中	下	四二	C
中	下	四三	C
中	下	四四	C
中	下	四五	C
中	下	四六	C
中	下	四七	C
中	下	四八	C
中	下	四九	B
中	下	五十	B
中	下	五一	B
中	下	五二	B
中	下	五三	B
中	下	五四	C
中	下	五五	C
中	下	五六	B
中	下	五七	B
中	下	五八	B
中	下	五九	B
中	下	六十	B
中	下	六一	C

冊	卷	丁	紙質
上	上	五三	C
上	上	五四	C
上	上	五五	C
上	上	五六	C
上	上	五七	C
上	上	五八	C
上	上	五九	C
上	上	六十	C
上	上	六一	C
上	上	六二	C
上	上	六三	C
上	上	六四	C
上	上	六五	C
上	上	六六	C
上	上	六七	C
上	上	六八	C
上	上	六九	C
上	上	七十	B
上	上	七一	B
上	上	七二	B
上	上	七三	B
上	上	七四	B
上	上	七五	B
上	上	七六	B
上	上	七八	A
上	上	七七	A
上	上	七九	A
上	上	八十	A
上	上	八一	D
上	上	八二	C
上	上	八三	C
上	上	八四	C
上	上	八五	C
上	上	八六	C
上	上	八七	C
上	上	八八	C
上	上	八九	C
上	上	九十	C
上	上	九一	C
上	上	九二	C
上	上	九三	C
上	上	九四	C
上	上	九五	C
上	上	九六終	C
中	下	目一	B
中	下	目二	B
中	下	目三	B
中	下	目四	B
中	下	目五	C
中	下	目六	C
中	下	目七	C
中	下	目八	C
中	下	目九	C
中	下	目十	C
中	下	一	C
中	下	二	C
中	下	三	C

冊	卷	丁	紙質
上	-	(序1)	A
上	-	(序2)	B
上	上	目一	C
上	上	目二	C
上	上	目三	A
上	上	一	C
上	上	二	C
上	上	三	C
上	上	四	C
上	上	五	C
上	上	六	C
上	上	七	C
上	上	八	C
上	上	九	C
上	上	十	C
上	上	十一	C
上	上	一二	C
上	上	一三	C
上	上	一四	C
上	上	一五	C
上	上	一六	C
上	上	一七	B
上	上	一八	B
上	上	一九	B
上	上	二十	B
上	上	二一	C
上	上	二二	C
上	上	二三	C
上	上	二四	C
上	上	二五	B
上	上	二六	B
上	上	二七	B
上	上	二八	B
上	上	二九	B
上	上	三十	B
上	上	三一	B
上	上	三二	B
上	上	三三	A
上	上	三四	A
上	上	三五	A
上	上	三六	A
上	上	三七	A
上	上	三八	D
上	上	三九	C
上	上	四十	B
上	上	四一	C
上	上	四二	C
上	上	四三	B
上	上	四四	B
上	上	四五	C
上	上	四六	C
上	上	四七	C
上	上	四八	C
上	上	四九	C
上	上	五十	C
上	上	五一	C
上	上	五二	C

【表1】底本の紙質出現パターン

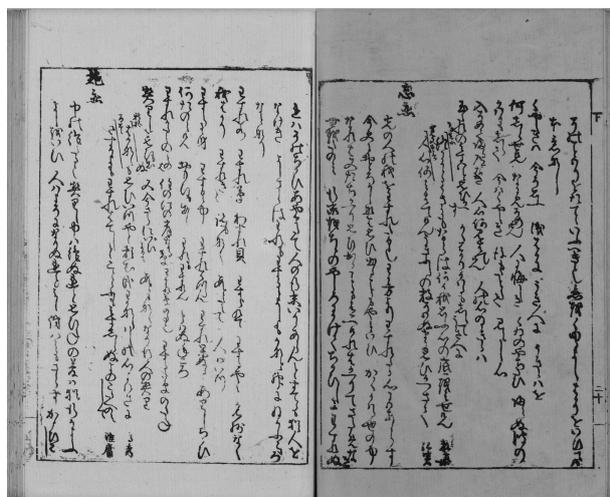


図15 底本 卷之下二十ウ～二一オ

冊	卷	丁	紙質
下	下	百七六	A
下	下	百七七	A
下	下	百七八	A
下	下	百七九	A
下	下	百八十	A
下	下	百八一	A
下	下	百八二	A
下	下	百八三	A
下	下	百八四	A
下	下	百八五	A
下	下	百八六	A
下	下	百八七	A
下	下	百八八	A
下	下	百八九	A
下	下	百九十	A
下	下	百九一	A
下	下	百九二	A
下	下	百九三	A
下	下	百九四	A
下	下	百九五	A
下	下	百九六終	A

冊	卷	丁	紙質
下	下	百十九	A
下	下	百二十	A
下	下	百二十一	A
下	下	百二十二	A
下	下	百二十三	A
下	下	百二十四	A
下	下	百二十五	A
下	下	百二十六	A
下	下	百二十七	A
下	下	百二十八	A
下	下	百二十九	A
下	下	百三十	A
下	下	百三十一	B
下	下	百三十二	A
下	下	百三十三	A
下	下	百三十四	B
下	下	百三十五	A
下	下	百三十六	A
下	下	百三十七	A
下	下	百三十八	A
下	下	百三十九	A
下	下	百四十	A
下	下	百四一	A
下	下	百四二	A
下	下	百四三	A
下	下	百四四	A
下	下	百四五	A
下	下	百四六	A
下	下	百四七	A
下	下	百四八	A
下	下	百四九	A
下	下	百五十	A
下	下	百五一	B
下	下	百五二	B
下	下	百五三	B
下	下	百五四	B
下	下	百五五	A
下	下	百五六	A
下	下	百五七	A
下	下	百五八	A
下	下	百五九	B
下	下	百六十	B
下	下	百六一	B
下	下	百六二	B
下	下	百六三	A
下	下	百六四	A
下	下	百六五	A
下	下	百六六	A
下	下	百六七	A
下	下	百六八	A
下	下	百六九	A
下	下	百七十	A
下	下	百七十一	A
下	下	百七十二	A
下	下	百七三	A
下	下	百七四	A
下	下	百七五	A

るのは容易ではない。

永井一彰氏は、近世後期の出版界において、板木を分割所有することを前提に、丁を丁順どおりに収めるのではなく、丁順をわざとばらして板木に収める「丁飛ばし」の方法がとられていたことを明らかにされている⁹⁾。この「丁飛ばし」を念頭に「表1」を見た場合、4丁の単位が崩れている箇所は、この丁飛ばしを原因の一つとして想定することもできるだろう。ただし、二丁張の板木が混在する可能性は捨てきれず、四丁張の板木に空白なく4丁分を彫っていたという前提も確認できない以上、さらなる推測を重ねるべきではないだろう。

しかし『和歌麿の塵』の例のように、また『暢寄帖』の例をも含めていえば、一点の板本に複数の紙質が混在する場合、その出現パターンには、その板本を摺刷した板木の構成がある程度表れていると見てよいだろう。どの丁がどの板木に収まっていたのか、全丁に及ぶ詳細までは分からなくとも、その板本が四丁張で摺刷されたのか、二丁張の板木で摺刷されたのかという判断は可能である。

それでは、なぜ一点の板本の中に、異なる紙質が混在するのだろうか。先にあげた拙稿では、時・場所の違いをその要因とするに留めたが、本稿ではより詳細に述べる。

第一には、複数人の摺師が同時に分担して摺刷を進めたが、摺師によって摺刷に用いた紙が異なったという可能性である。第二には、単純に摺刷の現場で紙が足りなくなり、新たに紙を追加したが、それまで摺刷に使っていた紙とは別種のものであったという可能性である。第三には、すでに摺り置き丁があり、新たに摺らなければならぬ箇所または部数のみ摺刷を行ったが、摺り置きの紙とは別種の紙を用いて摺刷した可能性である。第四には、相合版で板木を分割所有した際、摺師が板木のある場所に向いて摺刷を行っていくのが慣例だったが、行く先々で別種の紙を用いたという可能性である。いずれの可能性も、出版の現場で起こりうる事態として、想定しておくべきであろう。

しかも、これらの可能性は複合的に起こることが十分に考えられる。その時々「摺刷の空間」が紙質の混在に影響を与えるのであって、丁数の少ない板本ならばともかく、該書のように丁数の多い板本の場合、板木がよほど単純な仕立てられ方になっていない限り、紙質の混在によって板木の構成を完全に明らかにすることは難しいのかもしれない。つまり板木の構成が、都合よく板本に含まれる紙質の異なりとなって表われれば良いが、かえって複雑な状況を呈し、理解に苦しむ例も出てくるだろう。

紙質の異なりが板木の構成を完全に表しているか否か、その妥当性は慎重に見極める必要がある。しかし本節において示したとおり、ある程度有効な方法であることは、紙質の出現パターンに鑑みて間違いなく主張できる。紙質によって『和歌麿の塵』の板木の詳細な構成—どの丁がどの板木に収まっているか—は存分に明らかにし得ないが、紙質の混在

とその出現パターンは、該書が四丁張の板木を基本に調製され、摺刷されたことを端的に示している。

先に、一点の板本に異なる紙質が混在することは珍しくないと述べた。もちろん板木が現存する確率よりも、紙質の混在する例に行き当たることのほうが多いだろう。しかし珍しくないとはいえ、いつ何時も出会う事例ではなく、好例に出会うことを祈るより仕方がない。板木の現存・紙質の混在以外に、多くの板本に備わる「何か」によって板木の構成を知り得る方法はないだろうか。次節では、多くの板本に備わる匡郭の縦寸をもとに板木の構成をうかがう方法を試みる。

2 匡郭縦寸の高低差と板木

(1) 匡郭縦寸の高低差

数点の板本を眺めただけで気付くことであるが、板本を見開いた際に、左右の丁が段違いになり、全く揃わない事例に出会う。これらは頻繁に目にすることであり、特に珍しいことではない。しかしそれらを、何かで記され描かれている「本」として観察すると、内容上は特に差を設ける必要のない箇所、例えばひと続きの本文や見開きの挿絵においてもズレは生じるのであり、違和感を覚えることがある。

その理由の一つには、もともと揃うように製本されなかっただけであるという事実も確かにあろう。しかし一方でそれらの板本を、板木という木材を用いて摺刷された「モノ」であるという視点から観察したとき、単なる製本上の問題に帰してしまうことはできないと思われる。本節は以下、板本に頻繁に発生する匡郭のズレに注目し、そこに意味を見出す

うとする調査報告である。

匡郭寸法を扱った研究としては、木村三四吾氏の研究がよく知られている。木村氏は『西鶴織留』の諸版・諸本の匡郭縦寸を採寸された上で対照された^⑪。原版と比較して、覆刻本における覆刻箇所^⑫の版面の収縮率が、「匡郭縦長六一七耗平均」であることを指摘された上で、

本文の覆刻補版が概ね四の数を基準とし、その倍数を以て連続生起していることである。即ち

卷一 自十三丁至二十丁 計八丁
 卷二 自五丁至八丁 計四丁
 同 自十三丁至二十丁 計八丁
 卷三 自九丁至十六丁 計八丁
 卷四 自五丁至十六丁 計十二丁
 卷五 自十六丁至十八終丁 計三丁
 卷六 自五丁至十七終丁 計十三丁

【表2】 大沢本『西鶴織留』匡郭縦寸一覧(単位mm)

卷	丁付	匡郭高	卷	丁付	匡郭高
卷三	一五	203	卷一	自序	203
卷三	一六	206	卷一	团水序	—
卷三	一七	204	卷一	目録	204
卷四	目録	204	卷一	二	204
卷四	二	204	卷一	三	204
卷四	三	202	卷一	四	204
卷四	四	200	卷一	五	204
卷四	五	203	卷一	六	203
卷四	六	202	卷一	七	203
卷四	七	203	卷一	八	203
卷四	八	203	卷一	九	203
卷四	九	198	卷一	一〇	203
卷四	一〇	199	卷一	一一	204
卷四	一一	200	卷一	一二	203
卷四	一二	199	卷一	一三	199
卷四	一三	203	卷一	一四	199
卷四	一四	202	卷一	一五	199
卷四	一五	202	卷一	一六	201
卷四	一六	201	卷一	一七	204
卷四	一七	205	卷一	一八	204
卷四	一八	205	卷一	一九	204
卷四	一九	205	卷一	二〇	204
卷五	目録	201	卷一	二一	204
卷五	二	203	卷二	目録	201
卷五	三	203	卷二	二	201
卷五	四	203	卷二	三	202
卷五	五	200	卷二	四	201
卷五	六	200	卷二	五	202
卷五	七、八、九	201	卷二	六	202
卷五	一〇	202	卷二	七	203
卷五	一一	201	卷二	八	203
卷五	一二	200	卷二	九	202
卷五	一三	200	卷二	一〇	202
卷五	一四	201	卷二	一一	202
卷五	一五	201	卷二	一二	202
卷五	一六	203	卷二	一三	200
卷五	一七	203	卷二	一四	200
卷五	一八	203	卷二	一五	200
卷六	目録	203	卷二	一六	201
卷六	二	204	卷二	一七	201
卷六	三	204	卷二	一八	204
卷六	四	204	卷二	一九	201
卷六	五	197	卷二	二〇	200
卷六	六	198	卷三	目録	200
卷六	七	199	卷三	二	200
卷六	八	199	卷三	三	202
卷六	九	201	卷三	四	201
卷六	一〇	201	卷三	五	204
卷六	一一	202	卷三	六	203
卷六	一二	203	卷三	七	203
卷六	一三	200	卷三	八	203
卷六	一四	201	卷三	九	203
卷六	一五	201	卷三	一〇	203
卷六	一六	199	卷三	一一	204
卷六	一七	201	卷三	一二	203
			卷三	一三	206
			卷三	一四	206

ということとは織留の版木が二枚続きの長板で、その表裏の計四丁と述べられ、かつ諸本間の匡郭縦寸の比較対照から、後摺本でも版面が収縮されることを指摘された^⑬。この調査結果のうち、特に版面の収縮によつて覆刻・摺次を判断する手法は、板本書誌学の基礎となっている。

さて、木村氏は『西鶴織留』諸版・諸本の比較対照という視点から論を展開されたためか、後摺本における版面の収縮、または覆刻による版面の収縮を明解に指摘されたものの、一点の板本内部における匡郭縦寸の高低差については言及されるところがなかった。いま【表2】に、木村氏の調査から、現存本においてもっとも初摺に近いとされる大沢本の全丁匡郭縦寸を抜粋する。

このようにしてみると、もっとも初摺に近いと思われる一点の板本の中にあつても、匡郭高は決して一定ではなく、明らかな高低差があることが分かる。例えば巻一の「一三」〜「一六」丁はその前後に比べて2

5mm小さくなっていることが分かる。また、巻四の「九」〜「一二」丁、巻六の「五」〜「八」丁についても同様、前後の丁と比べて、数ミリ小さくなっていることが明らかに見て取れる。このことは、本節の冒頭に述べた見開きの左右の丁のズレが単に製本上の問題に起因するのではなく、そもそも匡郭寸が異なっているということを表している。注目すべきは、これらの高低差のパターンが4丁の単位を基本に表れていることであろう。

図16は、板本を板心側から観察したものである。このように、板本の板心側には、丁の折目上に存在する匡郭の天地や柱題、魚尾、黒口などが、ある種の模様となって浮かび上がる。むしろ板心側に模様が出ない場合もある。板本は図16のように、匡郭の天地のうちの地側を揃えて製本される場合が多い¹³⁾。もちろん、匡郭を揃えずに製本される場合もまま見られるが、地側を揃えてある場合の方が圧倒的に多い。そしてもう一点、匡郭の地側が揃えられた結果として、天側の匡郭や魚尾は不揃いになっていることも指摘できる。

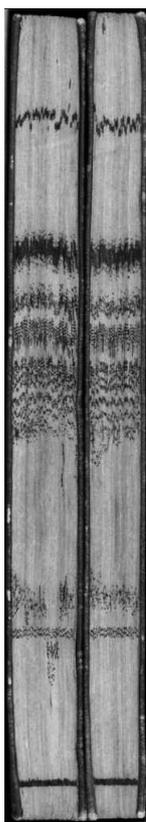


図16 『酔古堂剣掃』(立命館ARC所蔵、arcBK03-0006)

図版だけではうまく伝わらないが、この不揃いは、各丁ごとに全く不揃いというわけではない。何丁かごとに、高くなったり、低くなったりというまとまりがある。そして匡郭が高く隆起している箇所、低く陥没しているまとまりの丁数を数えてみたところ、やはり4の倍数、2の倍数となるのである。4や2という単位から考えて、これらの例は、板木

の多くが四丁張や二丁張であるということ、無関係ではないはずである。この現象は、図版を掲出した板本だけに限ったことではなく、極めて多くの板本上に起こっている。

これまで述べてきたことは、現象としては間違いなく指摘できることであるが、あくまでも仮説の域を出ない。しかしこの仮説は、板本に表われる匡郭の高低差という現象と、板木の構成を照合することによって証明できるであろう。以下では、板木が現存する板本について、匡郭高の測定を行い、その出現パターンを検証してみる。以下、本節の表中に示す板木のうち、板木No.がFで始まるものは立命館ARC所蔵、Fで始まるものは藤井文政堂所蔵(奈良大学博物館へ寄託)、それ以外は奈良大学博物館所蔵である。なお本節で扱う各底本に、裏打ちが施された板本は含まれていない。

『手印図』

底本は立命館ARC所蔵本(arcBK02-0085、半紙本一冊)。原題簽「手印図 十二合唱／五部秘伝 全」。刊記に「貞享元年甲子季冬上旬」とあって、板元名は削られている。貞享元年(一六八四)の初版であるが、底本は藤井文政堂の奥付が付された近代摺である。延宝七年(一六七九)刊『印図』の近代摺二冊と合綴。四丁張の板木五枚が現存している(揃)。【表3】によれば、「目録」〜「三」丁、および「十二」〜「十五」丁の各4丁分が、その中間にある「四」〜「十一」丁の8丁分に比べて匡郭縦寸が低くなっている。また巻末の「十六」〜「十七」丁の2丁分は題簽とともに一枚の板木(四丁張)に収まっているが、この2丁分の匡郭縦寸は他の丁と比較して格段に高くなっている。

【表3】『手印図』匡郭縦寸一覧(単位cm)

丁付	匡郭高	板木 No.
目録	15.7	F0065
一	15.8	F0065
二	15.7	F0065
三	15.8	F0065
四	16.1	F0066
五	16.0	F0066
六	16.0	F0066
七	16.0	F0066
八	16.1	F0067
九	16.0	F0067
十	16.1	F0067
十一	16.0	F0067
十二	15.8	F0082
十三	15.9	F0082
十四	15.8	F0082
十五	15.8	F0082
十六	16.4	F0075
十七	16.4	F0075

『竹譜詳録』

底本は立命館ARC所蔵本(ARC/KO1-0018、大本二冊)。原題簽「竹譜詳録 上」「竹譜詳録 下」。刊記に「宝曆六歲丙子秋九月」とあり、板元名は削る。宝曆六年(一七五六)初版。初版時の板元は林伊兵衛であるが、底本は、錢屋惣四郎の奥付を付した近代摺である。乱丁により「柯序三」丁が「自序二」丁の後に綴じられている。四丁張の板木十四枚が現存。

【表4】を見れば、卷之一「九」～「十二」丁の匡郭高は前後の丁と比較して格段に低くなっており、卷之二「五」～「八」丁、「九」～「十二」丁の8丁分についても同様である。

なお、卷之一「柯序二」～「柯序三」の4丁分は一枚の板木(T0529)に含まれるが、一枚の板木内で6～7mmの差が生じている。また同じく一枚の板木(T0536)に収まる卷之一「二十九」丁と「跋一」～「跋二」についても7mmの差が生じている。これらは、柯序と自序、本文と跋というように、内容上区別を付けることが可能であり、あらかじめ別々の板式が与えられていたと考えることにより、理解が可能である。

【表4】『竹譜詳録』匡郭縦寸一覧(単位cm)

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之一	牟叙一	22.9	T0039
卷之一	牟叙二	22.8	T0039
卷之一	牟叙三	22.8	T0039
卷之一	柯序一	22.8	T0039
卷之一	柯序二	22.4	T0529
卷之一	自序一	23.0	T0529
卷之一	自序二	23.1	T0529
卷之一	柯序三	22.4	T0529
卷之一	一	23.2	T0538
卷之一	二	23.2	T0538
卷之一	三	23.3	T0538
卷之一	四	23.3	T0538
卷之一	五	23.3	T0108
卷之一	六	23.2	T0108
卷之一	七	23.3	T0108
卷之一	八	23.3	T0108
卷之一	九	23.0	T0042
卷之一	十	23.0	T0042
卷之一	十一	23.0	T0042
卷之一	十二	23.0	T0042
卷之一	十三	23.3	T0041
卷之一	十四	23.3	T0041
卷之一	十五	23.4	T0041
卷之一	十六	23.4	T0041

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之一	十七	23.2	T0649
卷之一	十八	23.3	T0649
卷之一	十九	23.2	T0649
卷之一	二十	23.2	T0649
卷之一	二十一	23.3	T0046
卷之一	二十二	23.4	T0046
卷之一	二十三	23.4	T0046
卷之一	二十四	23.4	T0046
卷之一	二十五	23.2	T0047
卷之一	二十六	23.2	T0047
卷之一	二十七	23.3	T0047
卷之一	二十八	23.3	T0047
卷之一	二十九	23.4	T0536
卷之二	一	23.4	T0534
卷之二	二	23.4	T0534
卷之二	三	23.4	T0534
卷之二	四	23.4	T0534
卷之二	五	22.9	T0537
卷之二	六	22.9	T0537
卷之二	七	22.9	T0537
卷之二	八	23.0	T0537
卷之二	九	23.1	欠
卷之二	十	23.1	欠
卷之二	十一	23.1	欠

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之二	十二	23.1	欠
卷之二	十三	23.3	T0037
卷之二	十四	23.3	T0037
卷之二	十五	23.3	T0037
卷之二	十六	23.3	T0037
卷之二	十七	23.2	T0566
卷之二	十八	23.2	T0566
卷之二	十九	23.2	T0566
卷之二	二十	23.2	T0566
卷之二	跋	22.7	T0536
卷之二	跋	22.7	T0536

『賞奇軒墨竹譜』

底本は立命館ARC所蔵本 (ARC BK01-0034、大本1冊)。初版は宝暦一〇年(一七六〇)。四丁張の板木十二枚が現存する(揃)¹⁴⁾。

【表5】によれば、底本の匡郭高のパターンは比較的まばらであり、特徴をつかみにくい。「九」～「十二」丁は一枚の板木(T0386)に収まるが、各丁で4～7mmの差が発生している。これは該書に限った例ではなく、現在検証している手法が万能ではないことを示す。しかし「三十三」～「三十六」の4丁分の匡郭高が突出して高いことなど、底本が四丁張の板木で摺刷されたことを示す箇所はある。

【表5】『賞奇軒墨竹譜』匡郭縦寸一覽(単位cm)

丁付	匡郭高	板木 No.
(扉)	20.6	T0541
(序1)	20.1	T0965
(序2)	20.1	T0965
(跋1)	20.5	T0964
(跋1)	20.5	T0964
一	20.8	T0469
二	20.8	T0469
三	20.7	T0469
四	20.8	T0469
五	20.9	T0043
六	20.9	T0043
七	21.0	T0043
八	20.9	T0043
九	20.2	T0386
十	19.8	T0386
十一	19.8	T0386
十二	20.5	T0386
十三	20.3	T0541
十四	19.8	T0963
十五	19.3	T0963
十六	20.2	T0541
十七	20.8	T0925
十八	20.7	T0925
十九	20.6	T0925
二十	20.2	T0925
二十一	20.2	T0790
二十二	20.2	T0790
二十三	20.2	T0790
二十四	20.3	T0790
二十五	20.0	T0784
二十六	19.5	T0784
二十七	19.9	T0784
二十八	19.9	T0784
二十九	19.9	T0785
三十	19.6	T0785
三十一	19.7	T0785
三十二	19.9	T0785
三十三	20.9	欠
三十四	21.0	欠
三十五	21.0	欠
三十六	21.1	欠
三十七	20.2	T0541
三十八	19.5	T0963
三十九	19.8	T0963
四十	20.5	T0541

なお該書には先にふれた「丁飛ばし」の板木がある。T0541(扉、「十三」、「十六」、「三十七」、「四十」)にT0963(「十四」、「十五」、「三十八」、「三十九」)の二枚がそれに該当する。「三十七」丁の匡郭縦寸は、丁順の近い「三十八」「三十九」丁よりも、同じ板木に収まる「十三」「十六」丁に近いが、「四十」丁とは3mmの差がある。また「三十八」「三十九」丁の2丁間には3mm程度の差がある。底本に表れる事例は、匡郭縦寸の高低差によって、その板本の板木が何丁張だったかは推定できるが、どの4丁が一枚の板木に含まれていたかまで推定することは困難であることを示している。

『好古小録』

底本は京都大学附属総合図書館所蔵本(大惣本8・49コ2、大本2冊)。原題簽「好古小録 金石／書画 乾」「好古小録 雜考 坤」。奥付に「寛政七年乙卯九月刊行 平安書舗 林伊兵衛／小川多左衛門／西田莊兵衛／北村莊助／鷓鴣惣四郎」とある。

該書は本文に限っていえば、一枚を除き板木が現存しているため、検証しやすい。表6を見ると、4丁の単位が匡郭縦寸に良く表れているのは、上の「十七」丁以降巻末までであろう。「十七」～「二十」丁は21・5cm程度、「二十一」～「二十四」丁は21・2～21・3cmと小さく

なり、「二十五」～「二十八」丁は21・4～21・5cm、「二十九」～「三十二」丁は21・3～21・4cmとやや小さくなる傾向を示し、「三十三」～「三十六」丁は21・4～21・5cmと再び大きくなる。

T1000の板木には連続しない4丁が収まっている。上巻「十五」丁と下巻「十九」～「二十一」丁の4丁がそれぞれであるが、上巻「十五」丁が21・6cmと大きいものに対して、下巻「十九」～「二十一」丁は21・2cmと統一感を欠く。下巻「十九」～「二十一」丁は、むしろ丁順の近い下巻「二十」丁以前の各丁との統一感がある。板木が現存しなかったとしても、底本の板木が四丁張だったことは匡郭縦寸から容易に想定で

きるが、先の『賞奇軒墨竹譜』と同様、どの4丁が一枚の板木に収まっていたか、詳細な板木の仕立てられ方を推定することは難しい。

【表6】『好古小録』匡郭縦寸一覧（単位cm）

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
(序)		21.5	T0571
上	目一	21.4	T0571
上	目二	21.5	T0571
上	目三	21.5	T0571
上	目四	21.4	T1023
上	一	21.5	T1023
上	二	21.5	T1023
上	三	21.4	T1023
上	四	21.5	T0488
上	五	21.5	T0488
上	六	21.5	T0488
上	七	21.5	T0488
上	八	21.4	T0498
上	九	21.5	T0498
上	十	21.5	T0498
上	十一	21.4	T0498
上	十二	21.4	T0033
上	十三	21.5	T0033
上	十四	21.4	T0033
上	十五	21.6	T1000
上	十六	21.4	T0033
上	十七	21.5	T0515
上	十八	21.5	T0515
上	十九	21.5	T0515
上	二十	21.5	T0515
上	二十一	21.3	T0791
上	二十二	21.3	T0791
上	二十三	21.2	T0791
上	二十四	21.2	T0791
上	二十五	21.4	T0574
上	二十六	21.5	T0574
上	二十七	21.5	T0574
上	二十八	21.4	T0574
上	二十九	21.3	T0459
上	三十	21.3	T0459
上	三十一	21.3	T0459
上	三十二	21.4	T0459
上	三十三	21.5	T0483
上	三十四	21.4	T0483
上	三十五	21.5	T0483
上	三十六	21.5	T0483
下	目一	21.0	T0106
下	目二	21.2	T0106
下	一	21.1	T0106
下	二	21.2	T0106
下	三	21.2	T0413
下	四	21.1	T0413
下	五	21.1	T0413
下	六	21.1	T0413
下	七	21.1	T0495
下	八	21.0	T0495
下	九	20.9	T0495
下	十	21.0	T0495
下	十一	21.2	欠
下	十二	21.2	欠
下	十三	21.3	欠
下	十四	21.2	欠

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
下	十五	21.2	T0522
下	十六	21.2	T0522
下	十七	21.2	T0522
下	十八	21.2	T0522
下	十九	21.2	T1000
下	二十	21.2	T1000
下	二十一	21.2	T1000
附	一	20.8	T0984
附	二	20.8	T0984
附	三	20.8	T0984
附	四	20.9	T0984
附	五	20.9	T0381
附	六	21.0	T0381
附	七	21.0	T0381
附	八	21.1	T0381
附	九	21.3	T0962
附	十	21.5	T0962
附	十一	21.4	T0962
附	十二	21.5	T0962
附	十三	21.6	T0484
附	十四	21.6	T0484
附	十五	21.6	T0484
附	十六	21.6	T0484
奥付		21.6	欠

『好古日録』

底本は京都大学附属総合図書館所蔵本（大惣本8・49コ3、大本2冊）。
 原題簽欠。奥付に「集古図 全二冊 嗣出／寛政九年丁巳四月刊行／京兆書肆 林伊兵衛／小川多左衛門／西田莊兵衛／北村莊助／鶴鶴惣四郎」とある。

該書も板木が揃って現存しているため、板木の仕立てられ方との関連を読み取りやすいが、【表7】を見ると、特に乾の冊が理解しやすい。「五」

「八」丁の匡郭高は、それ以前の丁に比して若干小さく21・1～21・2 cm、「九」～「十二」丁ではそれよりも3 mm程度大きくなり、21・4～21・5 cm、「十三」～「十六」丁では21・1 cmと再び3～4 mm程小さくなる。「十七」～「二十」丁では21・5 cm前後、「二十一」～「二十四」丁では21・4 cm程度と若干小さくなり、「二十五」～「二十八」丁は21・6 cm程度、続く「二十九」～「三十二」丁では21・4～21・5 cm程度とやや小さくなる。おおむね現存の板木に則した形で、4丁を単位と

『和漢研譜』

底本は立命館ARC所蔵本 (arcBK01-0022、大本3冊)。原題簽「和漢研譜 一」「和漢研譜 二」「和漢研譜 三」。表紙見返しに「丁巳発兌」

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
坤	四十九	21.3	T0530
坤	五十	21.5	T0465
坤	五十一	21.5	T0465
坤	五十二	21.5	T0465
坤	五十三	21.4	T0465
坤	五十四	21.4	T1017
坤	五十五	21.3	T1017
坤	五十六	21.4	T1017
坤	五十七	21.2	T1017
坤	五十八	21.2	T0487
坤	五十九	21.2	T0487
坤	六十	21.3	T0487
坤	六十一	21.2	T0487
坤	六十二	21.2	T0237
坤	六十三	21.2	T0237
坤	六十四	21.2	T0237
坤	六十五	21.4	T0237
坤	六十六	21.4	T0334
坤	六十七	21.3	T0334
坤	六十八	21.3	T0334
坤	六十九	21.4	T0334
坤	七十終	21.2	T0930
坤	奥付	21.5	T0930

の年記があるように、初版は寛政九年（一七九七）。底本は卷之三の裏表紙見返しに山田茂助の蔵板目録を付した近代摺と思われる。

【表8】によれば、卷之二「一」「四」丁は匡郭縦寸が大きく、続

して高低が推移していることが見て取れる。

なおT0930の板木は連続しない4丁を収めており、「序」および奥付の匡郭寸法は21・4と21・5cm、「三十三」「七十終」は21・1と21・2cmである。一枚の板木に収まる4丁としては統一感がないが、序、刊記、本文はそれぞれ板式が異なっても不自然はない。先の『賞奇軒墨竹

譜』や『好古小録』の例とは異なり、例えば「三十二」丁は21・5cm、「六十九」丁は21・4cmと、T0930に収まる「三十三」「七十終」丁よりも匡郭縦寸が大きい。つまり、「三十三」「七十終」は、丁順の連続する丁よりも、同じ板木に収まっている板木との均一性が高いように思われる。

【表7】『好古日録』匡郭縦寸一覧表（単位cm）

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
乾	(序)	21.4	T0930
乾	目一	21.3	T0466
乾	目二	21.3	T0466
乾	目三	21.4	T0466
乾	目四	21.3	T0466
乾	一	21.3	T0640
乾	二	21.3	T0640
乾	三	21.3	T0640
乾	四	21.3	T0640
乾	五	21.1	T0796
乾	六	21.2	T0796
乾	七	21.1	T0796
乾	八	21.2	T0796
乾	九	21.5	T0482
乾	十	21.4	T0482
乾	十一	21.5	T0482
乾	十二	21.5	T0482
乾	十三	21.1	T0961
乾	十四	21.1	T0961
乾	十五	21.1	T0961
乾	十六	21.1	T0961
乾	十七	21.5	T1011
乾	十八	21.6	T1011
乾	十九	21.5	T1011
乾	二十	21.4	T1011
乾	二十一	21.4	T0463
乾	二十二	21.4	T0463
乾	二十三	21.4	T0463
乾	二十四	21.4	T0463
乾	二十五	21.5	T0497
乾	二十六	21.6	T0497
乾	二十七	21.7	T0497
乾	二十八	21.7	T0497
乾	二十九	21.5	T0050
乾	三十	21.5	T0050
乾	三十一	21.4	T0050
乾	三十二	21.5	T0050
乾	三十三	21.2	T0930
坤	三十四	21.3	T0794
坤	三十五	21.3	T0794
坤	三十六	21.1	T0794
坤	三十七	21.2	T0794
坤	三十八	21.6	T0396
坤	三十九	21.5	T0396
坤	四十	21.5	T0396
坤	四十一	21.5	T0396
坤	四十二	21.5	T0460
坤	四十三	21.5	T0460
坤	四十四	21.5	T0460
坤	四十五	21.6	T0460
坤	四十六	21.5	T0530
坤	四十七	21.4	T0530
坤	四十八	21.3	T0530

く「五」～「十二」丁の8丁分はそれよりも2～3mm小さくなっている。また次の「十三」～「十六」丁の4丁分はさらに5～6mm小さくなり、続く「十七」～「二十」丁は、3mm程度大きくなっている。巻末も特徴的であり、「三十七」～「四十」丁に比べて、「四十一」～「四十四」丁は2～3mm小さく、「四十五」～「四十八」丁はそれよりも3～4mm小

さい。巻之三「茅氏研譜」の「五」～「二十」丁（16丁分）、「研林」の「序二」～「十五」にも4丁を単位とする匡郭の高低差が表れている。該書の板木のうち、F0926には巻之二および巻之三の複数巻の丁が収まっているが、先の『好古日録』の例と同じく、丁順の近い丁よりも、同じ板木に含まれる丁の間で匡郭寸法がほぼ均一になっている。

【表8】『和漢研譜』匡郭縦寸一覧表（単位cm）

巻	丁付	匡郭高	板木 No.	巻	丁付	匡郭高	板木 No.
巻之二	二十五	21.5	欠	巻之一	扉	20.3	欠
巻之二	二十六	21.5	欠	巻之一	序一	20.9	欠
巻之二	二十七	21.4	欠	巻之一	序二	21.1	欠
巻之二	二十八	21.5	欠	巻之一	序三	21.1	欠
巻之二	二十九	21.1	欠	巻之一	目次一	21.5	欠
巻之二	三十	21.2	欠	巻之一	目次二	21.5	欠
巻之二	三十一	21.1	欠	巻之一	目次三	21.6	欠
巻之二	三十二	21.2	欠	巻之一	目次四	21.6	欠
巻之二	三十三	21.3	欠	巻之一	目次五	21.6	欠
巻之二	三十四	21.2	欠	巻之一	一	21.6	F0295
巻之二	三十五	21.3	欠	巻之一	二	21.6	F0295
巻之二	三十六	21.2	欠	巻之一	三	21.6	F0295
巻之二	三十七	21.5	T0937	巻之一	四	21.4	F0295
巻之二	三十八	21.6	T0937	巻之一	五	21.6	欠
巻之二	三十九	21.6	T0937	巻之一	六	21.6	欠
巻之二	四十	21.6	T0937	巻之一	七	21.6	欠
巻之二	四十一	21.3	T0931	巻之一	八	21.6	欠
巻之二	四十二	21.3	T0931	巻之一	九	21.5	欠
巻之二	四十三	21.3	T0931	巻之一	十	21.5	欠
巻之二	四十四	21.3	T0931	巻之一	十一	21.5	欠
巻之二	四十五	21.7	T0979	巻之一	十二	21.6	欠
巻之二	四十六	21.6	T0979	巻之一	十三	21.5	欠
巻之二	四十七	21.6	T0979	巻之一	十四	21.4	欠
巻之二	四十八	21.6	T0979	巻之一	十五	21.5	欠
巻之二	四十九	21.1	F0296	巻之一	十六	21.4	欠
巻之二	五十	21.1	F0296	巻之一	十七	21.5	F0293
巻之二	五十一終	21.5	欠	巻之一	十八	21.3	F0293
巻之三	一	21.5	F0298	巻之一	十九	21.5	F0293
巻之三	二	21.5	F0298	巻之一	二十	21.4	F0293
巻之三	三	21.4	F0298	巻之一	二十一	21.2	F0292
巻之三	四	21.4	F0298	巻之一	二十二	21.1	F0292
巻之三	五	21.6	欠	巻之一	二十三	21.2	F0292
巻之三（高氏研譜）	一	21.8	欠	巻之一	二十四終	21.3	F0292
巻之三（高氏研譜）	二	21.8	欠	巻之二	扉	20.3	欠
巻之三（高氏研譜）	三	22.0	欠	巻之二	一	21.7	T0333
巻之三（高氏研譜）	四	21.8	欠	巻之二	二	21.7	T0333
巻之三（高氏研譜）	五	21.4	F0294	巻之二	三	21.8	T0333
巻之三（高氏研譜）	六	21.4	F0294	巻之二	四	21.7	T0333
巻之三（高氏研譜）	七	21.4	F0294	巻之二	五	21.5	F0291
巻之三（高氏研譜）	八	21.4	F0294	巻之二	六	21.5	F0291
巻之三（高氏研譜）	九	21.6	欠	巻之二	七	21.5	F0291
巻之三（高氏研譜）	十	21.6	欠	巻之二	八	21.5	F0291
巻之三（茅氏研譜）	十一	21.6	欠	巻之二	九	21.5	欠
巻之三（茅氏研譜）	十二	21.6	欠	巻之二	十	21.6	欠
巻之三（茅氏研譜）	十三	21.4	欠	巻之二	十一	21.5	欠
巻之三（茅氏研譜）	十四	21.4	欠	巻之二	十二	21.6	欠
巻之三（茅氏研譜）	十五	21.5	欠	巻之二	十三	21.1	欠
巻之三（茅氏研譜）	十六	21.4	欠	巻之二	十四	21.1	欠
巻之三（茅氏研譜）	十七	21.8	欠	巻之二	十五	21.0	欠
巻之三（茅氏研譜）	十八	21.8	欠	巻之二	十六	21.1	欠
巻之三（茅氏研譜）	十九	21.8	欠	巻之二	十七	21.4	F0297
巻之三（茅氏研譜）	二十	21.8	欠	巻之二	十八	21.4	F0297
巻之三（茅氏研譜）	二十一	21.0	F0296	巻之二	十九	21.4	F0297
巻之三（茅氏研譜）	二十二	21.2	F0296	巻之二	二十	21.4	F0297
巻之三（研林）	序一	21.4	欠	巻之二	二十一	21.4	欠
巻之三（研林）	序二	21.3	T0948	巻之二	二十二	21.4	欠
巻之三（研林）	一	21.3	T0948	巻之二	二十三	21.3	欠
巻之三（研林）	二	21.3	T0948	巻之二	二十四	21.3	欠

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之三 (研林)	三	21.3	T0948
卷之三 (研林)	四	21.7	T0300
卷之三 (研林)	五	21.8	T0300
卷之三 (研林)	六	21.8	T0300
卷之三 (研林)	七	21.8	T0300
卷之三 (研林)	八	20.7	欠
卷之三 (研林)	九	20.8	欠
卷之三 (研林)	十	21.0	欠
卷之三 (研林)	十一	20.8	欠
卷之三 (研林)	十二	21.7	F0299
卷之三 (研林)	十三	21.8	F0299
卷之三 (研林)	十四	21.8	F0299
卷之三 (研林)	十五	21.7	F0299

『年山紀聞』

底本は架蔵本（大本6冊）。第一・第三を除き原題簽存、ただし第五はごく一部のみ。「年山紀聞 第二」「年山紀聞 第四」「年山紀聞 第六終」。刊記「文化元年甲子三月発行／平安 小川多左衛門／娑々岐惣四郎／北村莊助／林伊兵衛／小川五兵衛／能勢儀兵衛／東都 北沢伊八／北沢孫七」。四丁張の板木四枚が現存する。

【表9】によれば、卷之一「二十五」～「二十八」丁の匡郭縦寸は21・4～21・5 cmで、直前の「二十一」～「二十四」丁の21・1 cm程度よりも格段に大きい。また続く「二十九」～「三十二」丁は21・1 cmと再び小さくなり、「三十三」～「三十六」丁は21・3～21・4 cmと大きくなっていく。卷之三の冒頭「一」～「四」丁は、21・7 cm前後と大きく、「五」～「八」丁では21・4 cmとやや小さくなる傾向を示す。「九」～「十二」丁では21・5～21・6 cmと直前の4丁よりもやや大きくなっている。

該書の板木は、全丁数に対して板木の現存量が少なく、全体の構成を想定することは難しい。しかし卷之四に目を移すと、「八」～「十一」

丁が21・2 cmと前後の丁と比べて小さく、また均一性があり、確実に一枚の板木に収まっていたと思われる。すると卷之四は、卷の冒頭から4丁ずつ板木に収めたわけではないことが分かる。しかし同卷「十七」～「二十」丁は21・2～21・3 cm、「二十一」～「二十四」丁は21・6～21・7 cmと4丁分のまとまりを見せており、丁付自体も4の倍数に戻る。つまり、同卷「一」～「七」丁および「十二」～「十六」丁のどこかで、「丁飛ばし」なり、中途半端になった別巻の巻末と組み合わせるなりの操作が行われている事実が見えてくる。

最終的にどのような組み合わせで4丁が一枚の板木に収まったかまでは分からないが、匡郭の縦寸を手がかりに板木の構成を探ってみると、板木の構成についてどの部分に操作が加わっているか、概要が見えてくるのである。

【表9】『年山紀聞』匡郭縦寸一覧表（単位cm）

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之一	序	21.2	欠
卷之一	序	21.2	欠
卷之一	序	20.7	欠
卷之一	序	20.6	欠
卷之一	一	21.5	欠
卷之一	二	21.5	欠
卷之一	三	21.4	欠
卷之一	四	21.4	欠
卷之一	五	20.9	欠
卷之一	六	21.0	欠
卷之一	七	21.0	欠
卷之一	八	21.0	欠
卷之一	九	21.8	欠
卷之一	十	21.2	欠
卷之一	十一	21.2	欠
卷之一	十二	21.2	欠
卷之一	十三	21.4	欠
卷之一	十四	21.4	欠
卷之一	十五	21.2	欠
卷之一	十六	21.4	欠
卷之一	十七	21.4	欠
卷之一	十八	21.4	欠
卷之一	十九	21.4	欠

巻	丁付	匡郭高	板木 No.
巻之四	八	21.2	欠
巻之四	九	21.2	欠
巻之四	十	21.2	欠
巻之四	十一	21.2	欠
巻之四	十二	21.7	欠
巻之四	十三	21.7	欠
巻之四	十四	21.5	欠
巻之四	十五	21.5	欠
巻之四	十六	21.6	欠
巻之四	十七	21.3	欠
巻之四	十八	21.3	欠
巻之四	十九	21.2	欠
巻之四	二十	21.3	欠
巻之四	二十一	21.7	欠
巻之四	二十二	21.7	欠
巻之四	二十三	21.7	欠
巻之四	二十四	21.6	欠
巻之四	二十五	21.0	欠
巻之四	二十六	21.2	欠
巻之四	二十七	21.2	欠
巻之四	二十八	21.1	欠
巻之四	二十九	21.3	欠
巻之四	三十	21.1	欠
巻之四	三十一	21.4	欠
巻之四	三十二	21.2	欠
巻之四	三十三	21.6	欠
巻之四	三十四	21.6	欠
巻之四	三十五終	21.6	欠
巻之五	一	21.3	欠
巻之五	二	21.3	欠
巻之五	三	21.3	欠
巻之五	四	21.3	欠
巻之五	五	21.5	欠
巻之五	六	21.5	欠
巻之五	七	21.5	欠
巻之五	八	21.5	欠
巻之五	九	21.6	欠
巻之五	十	21.7	欠
巻之五	十一	21.7	欠
巻之五	十二	21.2	欠
巻之五	十三	21.3	T0698
巻之五	十四	21.4	T0698
巻之五	十五	21.3	T0698
巻之五	十六	21.4	T0698
巻之五	十七	21.4	欠
巻之五	十八	21.4	欠
巻之五	十九	21.3	欠
巻之五	二十	21.5	欠
巻之五	二十一	21.6	欠
巻之五	二十二	21.6	欠
巻之五	二十三	21.6	欠
巻之五	二十四	21.6	欠

巻	丁付	匡郭高	板木 No.
巻之二	三十四	21.2	欠
巻之二	三十五	21.2	欠
巻之二	三十六	21.3	欠
巻之二	三十七	21.4	欠
巻之二	三十八	21.3	欠
巻之二	三十九	21.2	欠
巻之二	四十終	21.3	欠
巻之三	一	21.8	欠
巻之三	二	21.7	欠
巻之三	三	21.7	欠
巻之三	四	21.6	欠
巻之三	五	21.4	欠
巻之三	六	21.4	欠
巻之三	七	21.4	欠
巻之三	八	21.4	欠
巻之三	九	21.6	欠
巻之三	十	21.6	欠
巻之三	十一	21.5	欠
巻之三	十二	21.5	欠
巻之三	十三	21.4	欠
巻之三	十四	21.4	欠
巻之三	十五	21.4	欠
巻之三	十六	21.4	欠
巻之三	十七	21.4	欠
巻之三	十八	21.4	欠
巻之三	十九	21.4	欠
巻之三	二十	21.3	欠
巻之三	二十一	21.6	欠
巻之三	二十二	21.6	欠
巻之三	二十三	21.5	欠
巻之三	二十四	21.5	欠
巻之三	二十五	21.5	欠
巻之三	二十六	21.5	欠
巻之三	二十七	21.4	欠
巻之三	二十八	21.5	欠
巻之三	二十九	21.4	欠
巻之三	三十	21.4	欠
巻之三	三十一	21.3	欠
巻之三	三十二	21.4	欠
巻之三	三十三	21.6	欠
巻之三	三十四	21.6	欠
巻之三	三十五	21.6	欠
巻之三	三十六	21.6	欠
巻之三	三十七	21.5	欠
巻之三	三十八終	21.5	欠
巻之四	一	21.6	欠
巻之四	二	21.5	欠
巻之四	三	21.5	欠
巻之四	四	21.6	欠
巻之四	五	21.8	欠
巻之四	六	21.8	欠
巻之四	七	21.6	欠

巻	丁付	匡郭高	板木 No.
巻之一	二十	21.4	欠
巻之一	二十一	21.2	欠
巻之一	二十二	21.1	欠
巻之一	二十三	21.0	欠
巻之一	二十四	21.1	欠
巻之一	二十五	21.4	T0651
巻之一	二十六	21.4	T0651
巻之一	二十七	21.5	T0651
巻之一	二十八	21.4	T0651
巻之一	二十九	21.1	欠
巻之一	三十	21.1	欠
巻之一	三十一	21.1	欠
巻之一	三十二	21.1	欠
巻之一	三十三	21.3	欠
巻之一	三十四	21.4	欠
巻之一	三十五	21.4	欠
巻之一	三十六	21.3	欠
巻之一	三十七	21.5	欠
巻之一	三十八終	21.5	欠
巻之二	一	21.2	欠
巻之二	二	21.2	欠
巻之二	三	21.2	欠
巻之二	四	21.2	欠
巻之二	五	21.1	欠
巻之二	六	21.1	欠
巻之二	七	21.1	欠
巻之二	八	21.1	欠
巻之二	九	21.2	欠
巻之二	十	21.2	欠
巻之二	十一	21.2	欠
巻之二	十二	21.2	欠
巻之二	十三	21.4	欠
巻之二	十四	21.4	欠
巻之二	十五	21.3	欠
巻之二	十六	21.4	欠
巻之二	十七	21.2	欠
巻之二	十八	21.2	欠
巻之二	十九	21.3	欠
巻之二	二十	21.2	欠
巻之二	二十一	21.1	欠
巻之二	二十二	21.1	欠
巻之二	二十三	21.1	欠
巻之二	二十四	21.1	欠
巻之二	二十五	21.0	欠
巻之二	二十六	21.0	欠
巻之二	二十七	21.1	欠
巻之二	二十八	21.1	欠
巻之二	二十九	21.1	欠
巻之二	三十	21.0	欠
巻之二	三十一	21.1	欠
巻之二	三十二	21.1	欠
巻之二	三十三	21.3	欠

巻	丁付	匡郭高	板木 No.
巻之五	二十五	21.6	欠
巻之五	二十六	21.5	欠
巻之五	二十七	21.5	欠
巻之五	二十八	21.5	欠
巻之五	二十九	21.5	欠
巻之五	三十	21.4	欠
巻之五	三十一	21.5	欠
巻之五	三十二	21.3	欠
巻之五	三十三終	21.6	欠
巻之六	一	20.7	欠
巻之六	二	20.9	欠
巻之六	三	20.8	欠
巻之六	四	20.8	欠
巻之六	五	20.8	欠
巻之六	六	20.8	欠
巻之六	七	20.8	欠
巻之六	八	20.9	欠
巻之六	九	20.8	欠
巻之六	十	20.8	欠
巻之六	十一	20.6	欠
巻之六	十二	20.6	欠
巻之六	十三	21.5	欠
巻之六	十四	21.5	欠
巻之六	十五	21.5	欠
巻之六	十六	21.5	欠
巻之六	十七	21.4	欠
巻之六	十八	21.3	欠
巻之六	十九	21.4	欠
巻之六	二十	21.4	欠
巻之六	二十一	21.1	欠
巻之六	二十二	21.3	欠
巻之六	二十三	21.2	欠
巻之六	二十四	21.2	欠
巻之六	二十五	21.3	T0584
巻之六	二十六	21.3	T0584
巻之六	二十七	21.2	T0584
巻之六	二十八	21.3	T0584
巻之六	二十九	21.2	欠
巻之六	三十	21.2	欠
巻之六	三十一	21.2	欠
巻之六	三十二	21.2	欠
巻之六	三十三	21.5	欠
巻之六	三十四	21.5	欠
巻之六	三十五	21.4	欠
巻之六	三十六	21.4	欠
巻之六	三十七	20.9	欠
巻之六	三十八	21.0	欠
巻之六	三十九	20.9	欠
巻之六	四十	20.8	欠
巻之六	四十一	21.2	T0561
巻之六	四十二	21.3	T0561
巻之六	跋・刊記	21.3	T0561

『左国易一家言』

底本は立命館ARC所蔵本 (arcBK02-0054、半紙本3冊)。文政元年(二八一八)の初版。刊記に「官許 文化十四年丁丑歳四月/発兌 文政新元戊寅歳八月/含章堂蔵/書売 大阪 網屋茂兵衛/藤屋弥兵衛/河内屋喜兵衛/江戸 須原屋茂兵衛」とあるが、巻之下の奥付に「大阪心斎橋備後町南エ入/小谷卯兵衛」の蔵板目録が付されている。表紙見返しには「浪華書売 浅野星文堂」とある。近代摺。四丁張の板木二枚が現存し、うちF0056○には袋(表紙見返し)を含んでいるが、「浪華」および「浅野星文堂」を削り、「文政堂」と入木している。

【表10】によれば、巻之上「十七」〜「二十」丁が同巻の中では最も匡郭縦寸が小さいが、それに続く「二十一」〜「二十四」丁は逆に最も大きく、「十七」〜「二十」丁に比して3〜4mmも大きくなっている。続く「二十五」〜「二十八」丁は直前の4丁よりは2〜3mm程度小さい。また巻之の中では18・7〜18・8cmと大きな「二十九」〜「三十二」丁および「三十七」〜「三十九」丁に挟まれて、「三十三」〜「三十六」丁の4丁分は2〜3mm小さくなっている。なお「三十七」〜「三十九」丁

が3丁分であるが、先述のとおりF0056○の板木にはこの3丁と合わせて袋が彫られているためである。

『北辺随筆』

底本は立命館ARC所蔵本 (arcBK01-0023、大本4冊)。元題簽「北辺随筆 初編 一」「北辺随筆 初編 二」「北辺随筆 初編 三」「北辺随筆 初編 四」。奥付に「文政二年己卯五月新刊/平安書林 銭屋惣四郎/菱屋孫兵衛/木村吉右衛門/天王寺屋市郎兵衛」とある。四丁張の板木八枚が現存。

【表11】から特徴的な部分を拾うと、巻之一「十二」〜「十五」丁が前後の丁に比して匡郭縦寸が小さく、続く「十六」〜「十九」丁は前後の丁と比較して突出して大きい。また巻之三「廿二」〜「廿五」丁、同巻「三十」〜「卅三」丁は、前後の丁に比して、2〜3mm程度低くなっているなど、やはり4丁単位での高低差が表れている。

該書は、各巻冒頭に目録がある。永井氏の報告によれば、板木を仕立てる際には、「原則的に本文冒頭から起こして行く」傾向があるとのこと

【表10】『左国易一家言』匡郭縦寸一覧表

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之中	二十九	18.7	欠
卷之中	三十	18.7	欠
卷之中	三十一	18.7	欠
卷之中	三十二	18.7	欠
卷之中	三十三	18.5	欠
卷之中	三十四	18.5	欠
卷之中	三十五	18.5	欠
卷之中	三十六	18.5	欠
卷之中	三十七	18.7	F0056○
卷之中	三十八	18.7	F0056○
卷之中	三十九	18.8	F0056○
卷之下	一	18.7	欠
卷之下	二	18.8	欠
卷之下	三	18.8	欠
卷之下	四	18.8	欠
卷之下	五	18.4	欠
卷之下	六	18.4	欠
卷之下	七	18.4	欠
卷之下	八	18.4	欠
卷之下	九	18.4	欠
卷之下	十	18.5	欠
卷之下	十一	18.5	欠
卷之下	十二	18.4	欠
卷之下	十三	18.7	欠
卷之下	十四	18.7	欠
卷之下	十五	18.7	欠
卷之下	十六	18.7	欠
卷之下	十七	18.7	欠
卷之下	十八	18.7	欠
卷之下	十九	18.7	欠
卷之下	二十	18.7	欠
卷之下	二十一	18.5	arcMD01-0004
卷之下	二十二	18.5	arcMD01-0004
卷之下	二十三	18.6	arcMD01-0004
卷之下	二十四	18.6	arcMD01-0004
卷之下	二十五	18.5	欠
卷之下	二十六	18.5	欠
卷之下	二十七	18.5	欠
卷之下	二十八	18.6	欠
卷之下	二十九	18.7	欠
卷之下	三十	18.6	欠
卷之下	三十一	18.7	欠
卷之下	三十二	18.7	欠
卷之下	三十三	18.8	欠
卷之下	三十四	18.8	欠
卷之下	三十五	18.8	欠
卷之下	三十六	18.8	欠
卷之下	三十七	18.6	欠
卷之下	三十八	18.6	欠
卷之下	三十九	18.6	欠
卷之下	四十	18.6	欠
卷之下	四十一	18.6	欠
卷之下	四十二	18.6	欠
卷之下	刊記	18.9	欠

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之上	一	18.6	欠
卷之上	二	18.5	欠
卷之上	三	18.5	欠
卷之上	四	18.6	欠
卷之上	五	18.5	欠
卷之上	六	18.5	欠
卷之上	七	18.5	欠
卷之上	八	18.5	欠
卷之上	九	18.7	欠
卷之上	十	18.6	欠
卷之上	十一	18.7	欠
卷之上	十二	18.6	欠
卷之上	十三	18.5	欠
卷之上	十四	18.5	欠
卷之上	十五	18.5	欠
卷之上	十六	18.5	欠
卷之上	十七	18.4	欠
卷之上	十八	18.4	欠
卷之上	十九	18.4	欠
卷之上	二十	18.4	欠
卷之上	二十一	18.8	欠
卷之上	二十二	18.7	欠
卷之上	二十三	18.7	欠
卷之上	二十四	18.7	欠
卷之上	二十五	18.6	欠
卷之上	二十六	18.6	欠
卷之上	二十七	18.5	欠
卷之上	二十八	18.6	欠
卷之中	一	18.3	欠
卷之中	二	18.4	欠
卷之中	三	18.4	欠
卷之中	四	18.3	欠
卷之中	五	18.5	欠
卷之中	六	18.5	欠
卷之中	七	18.5	欠
卷之中	八	18.5	欠
卷之中	九	18.4	欠
卷之中	十	18.4	欠
卷之中	十一	18.4	欠
卷之中	十二	18.5	欠
卷之中	十三	18.5	欠
卷之中	十四	18.5	欠
卷之中	十五	18.5	欠
卷之中	十六	18.5	欠
卷之中	十七	18.6	欠
卷之中	十八	18.6	欠
卷之中	十九	18.6	欠
卷之中	二十	18.6	欠
卷之中	二十一	18.8	欠
卷之中	二十二	18.8	欠
卷之中	二十三	18.8	欠
卷之中	二十四	18.8	欠
卷之中	二十五	18.8	欠
卷之中	二十六	18.8	欠
卷之中	二十七	18.8	欠
卷之中	二十八	18.8	欠

とである¹⁵⁾。つまり、本文が板木にすっきり収まらないケースでは、板木の空きスペースを利用して本文からあふれるもの（題簽・袋・序・跋など）などを空きスペースに彫ること、板木に空きスペースがない場合にはこれらを彫るための別板を仕立てることを豊富な実例とともに報告されている。その中で、目録と本文の板木が別に仕立てられている例としては、寛文十年刊『種子集』、寛文十一年刊『増補悉曇初心鈔』、同年刊『諸尊種子真言集』、天明元年刊『古文孝経』がある。つまり目録は本文の一部ではなく、題簽・袋・序・跋などと同様、本文からあふれるものと見なされる場合もあったのである。

該書の目録はどのように捉えるべきだろうか。現存する該書の板木八枚の中には、本文冒頭または題簽を含むものがない。またそもそも巻之一の板木が一枚も現存しておらず、巻之一の目録がどこに彫られていたのか、知る術がないかのように思われる。【表11】に戻る。先に匡郭寸

法の出現パターンが特徴的とした箇所は巻之一「十二」～「十五」丁の4丁分がある。本文冒頭つまり「一」丁から4丁ずつ板木を構成していった場合、「十二」～「十五」丁という範囲がありえないことは自明であろう。匡郭寸法に注目すれば、巻之一「目一」～「三」丁の4丁は、前後の丁に比して若干高く揃っている。したがってこの4丁分は一枚の板木に仕立てられていたと考えられる。以降4丁ずつ仕立てていけば、「十二」～「十五」丁が一枚の板木に仕立てられていたということも、何ら疑問はないのである。

永井氏が述べられた原則のみでは該書の目録が板木上でどのように扱われていたか分からないが、現在検証している匡郭縦寸の高低差¹⁶⁾板木の異なりという原則を合わせて考える時、該書の板木は目録を本文の冒頭と見なして板木を構成していったという事実が浮かびあがってくる。

【表11】『北辺随筆』匡郭縦寸一覧表（単位cm）

巻	丁付	匡郭高	板木 No.
巻之一	初序	20.5	欠
巻之一	目	20.7	欠
巻之一	一	20.7	欠
巻之一	二	20.7	欠
巻之一	三	20.7	欠
巻之一	四	20.6	欠
巻之一	五	20.5	欠
巻之一	六	20.5	欠
巻之一	七	20.6	欠
巻之一	八	20.5	欠
巻之一	九	20.5	欠
巻之一	十	20.5	欠
巻之一	十一	20.6	欠
巻之一	十二	20.4	欠
巻之一	十三	20.4	欠
巻之一	十四	20.3	欠
巻之一	十五	20.3	欠
巻之一	十六	20.8	欠
巻之一	十七	20.8	欠
巻之一	十八	20.9	欠
巻之一	十九	20.9	欠
巻之一	廿	20.3	欠
巻之一	廿一	20.3	欠
巻之一	廿二	20.3	欠
巻之一	廿三	20.4	欠
巻之一	廿四	20.3	欠
巻之一	廿五	20.4	欠
巻之一	廿六	20.4	欠
巻之一	廿七	20.4	欠
巻之一	廿八	20.4	欠
巻之一	廿九	20.5	欠
巻之一	三十	20.4	欠
巻之一	卅一	20.3	欠
巻之一	卅二	20.4	欠
巻之一	卅三	20.3	欠
巻之一	卅四	20.3	欠
巻之二	目一	20.3	欠
巻之二	目二	20.2	欠
巻之二	壹	20.3	欠
巻之二	二	20.2	欠
巻之二	三	20.4	欠
巻之二	四	20.4	欠
巻之二	五	20.4	欠
巻之二	六	20.4	欠
巻之二	七	20.4	欠
巻之二	八	20.3	欠
巻之二	九	20.3	欠
巻之二	十	20.4	欠
巻之二	十一	20.2	欠
巻之二	十二	20.2	欠
巻之二	十三	20.2	欠
巻之二	十四	20.3	欠
巻之二	十五	20.3	欠
巻之二	十六	20.3	欠
巻之二	十七	20.3	欠
巻之二	十八	20.3	欠
巻之二	十九	20.3	欠
巻之二	二十	20.0	欠

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之二	卅一	20.3	欠
卷之二	卅二	20.1	欠
卷之二	卅三	20.2	欠
卷之二	卅四	20.4	欠
卷之二	卅五	20.4	欠
卷之二	卅六	20.4	欠
卷之二	卅七	20.1	欠
卷之二	卅八	20.1	欠
卷之二	卅九	20.1	欠
卷之二	三十	20.1	欠
卷之二	卅一	20.5	欠
卷之二	卅二	20.3	欠
卷之二	卅三	20.5	欠
卷之二	卅四	20.5	欠
卷之二	卅五	20.7	欠
卷之二	卅六	20.8	欠
卷之二	卅七	20.8	欠
卷之二	卅八	20.8	欠
卷之二	卅九	20.7	欠
卷之二	四十	20.7	欠
卷之二	四十一	20.7	欠
卷之二	四十二	20.7	欠
卷之二	四十三	20.6	欠
卷之三	目	20.6	欠
卷之三	一	20.5	欠
卷之三	二	20.4	欠
卷之三	三	20.3	欠
卷之三	四	20.3	欠
卷之三	五	20.3	欠
卷之三	六	20.4	欠
卷之三	七	20.4	欠
卷之三	八	20.3	欠
卷之三	九	20.5	欠
卷之三	十	20.6	欠
卷之三	十一	20.6	欠
卷之三	十二	20.6	欠
卷之三	十三	20.6	欠
卷之三	十四	20.5	T0344
卷之三	十五	20.6	T0344
卷之三	十六	20.6	T0344
卷之三	十七	20.6	T0344
卷之三	十八	20.5	欠
卷之三	十九	20.5	欠
卷之三	二十	20.4	欠
卷之三	卅一	20.4	欠
卷之三	卅二	20.3	欠
卷之三	卅三	20.3	欠
卷之三	卅四	20.3	欠
卷之三	卅五	20.3	欠
卷之三	卅六	20.6	欠
卷之三	卅七	20.5	欠
卷之三	卅八	20.6	欠
卷之三	卅九	20.5	欠
卷之三	三十	20.3	欠
卷之三	卅一	20.3	欠
卷之三	卅二	20.2	欠
卷之三	卅三	20.2	欠
卷之三	卅四	20.5	欠

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之三	卅五	20.5	欠
卷之三	卅六	20.5	欠
卷之四	目	20.5	欠
卷之四	一	20.5	欠
卷之四	二	20.5	欠
卷之四	三	20.6	欠
卷之四	四	20.6	欠
卷之四	五	20.6	T0360
卷之四	六	20.6	T0360
卷之四	七	20.6	T0360
卷之四	八	20.6	T0360
卷之四	九	20.6	T0057
卷之四	十	20.6	T0057
卷之四	十一	20.5	T0057
卷之四	十二	20.6	T0057
卷之四	十三	20.7	T0496
卷之四	十四	20.7	T0496
卷之四	十五	20.7	T0496
卷之四	十六	20.7	T0496
卷之四	十七	20.5	T0489
卷之四	十八	20.5	T0489
卷之四	十九	20.5	T0489
卷之四	二十	20.5	T0489
卷之四	卅一	20.5	T0055
卷之四	卅二	20.5	T0055
卷之四	卅三	20.5	T0055
卷之四	卅四	20.5	T0055
卷之四	卅五	20.6	T0059
卷之四	卅六	20.6	T0059
卷之四	卅七	20.6	T0059
卷之四	卅八	20.6	T0059
卷之四	卅九	20.4	T0337
卷之四	三十	20.5	T0337
卷之四	卅一	20.5	T0337
卷之四	卅二	20.5	T0337
卷之四	卅三	20.6	欠
卷之四	卅四	20.5	欠
卷之四	卅五	20.5	欠
卷之四	卅六	20.5	欠
卷之四	卅七	20.5	欠
卷之四	奥付	19.9	欠

『眼前教近道』

底本は立命館ARC所蔵本(arcBK02-0051、半紙本1冊)。原題簽「眼前教近道 全」。奥付に「文政十戊子年新刻／弘化四丁未年求刻／江戸須原屋茂兵衛／岡田屋嘉七／山城屋佐兵衛／大坂 河内屋喜兵衛／敦賀屋九兵衛／河内屋茂兵衛」／八日市 小杉文右衛門／京 蛭子屋治助／錢屋惣四郎」とある。底本の奥付および国文学研究資料館「日本古典

籍総合目録」によれば、文政二二年版(永楽屋東四郎刊)が初版であるが、底本は弘化四年版である。四丁張の板木三枚が現存。

【表12】によれば、特に「九」〜「二十四」丁によく表れているように、「九」〜「十二」丁の匡郭縦寸が最も大きい4丁分から、次の「十三」〜「十六」丁は3〜4mm程度も小さく、「十七」〜「二十」と「二十一」〜「二十四」に至るまで、4丁を単位として階段状に高くなっている。

【表12】『眼前教近道』匡郭縦寸一覧表（単位cm）

丁付	匡郭高	板木 No.
一	17.6	欠
二	17.7	欠
三	17.6	欠
四	17.6	欠
五	17.7	欠
六	17.7	欠
七	17.7	欠
八	17.7	欠
九	17.8	欠
十	17.8	欠
十一	17.8	欠
十二	17.9	欠
十三	17.5	欠
十四	17.5	欠
十五	17.5	欠
十六	17.5	欠
十七	17.6	欠
十八	17.6	欠
十九	17.6	欠
二十	17.6	欠
二十一	17.8	欠
二十二	17.8	欠
二十三	17.8	欠
二十四	17.8	欠
二十五	17.6	T0305
二十六	17.7	T0305
二十七	17.7	T0305
二十八	17.7	T0305
二十九	17.7	T0432
三十	17.7	T0432
三十一	17.7	T0432
三十二	17.7	T0432
三十三	17.7	T0202
三十四	17.7	T0202
奥付等	17.7	欠

『酔古堂剣掃』

底本は立命館ARC所蔵本（arcBK03-0066、中本2冊）。元題簽「酔古堂剣掃 一」「酔古堂剣掃 二」。表紙見返しに「平安書舗 星文堂／文栄堂／文泉堂」、奥付に「皇都寺町通六角南式部町十三番戸／書肆聖華房 山田茂助蔵版」とある。初版は嘉永六年（一八五三）刊（跋文による）。四丁張の板木九枚が現存。

【表13】から分かりやすい点を拾うと、巻之四「十三」～「十六」丁の4丁分、巻之七「五」～「八」丁は匡郭縦寸が前後と比較して2mm小さくなっている。巻之一「十二」～「十四」丁の3丁分が突出して大きくなっているが、この3丁分は「叙」であり、もともと本文とは別の板式が与えられていたのだろう。

該書には複数巻の丁を収める板木が一枚現存している。巻之二「九」～「十一」丁の3丁分と巻之七「十三」丁を収めたT1033がそれぞれあるが、巻之二の3丁分は15・2mm～15・3mm、巻之七の1丁分は15mm

と均一性を欠く。

巻之二は全11丁で、冒頭から4丁ずつ板木を仕立てたとすると1丁分の空きスペースが生まれる。巻之七は全14丁あり、直前の「九」～「十二」丁を収める板木は現存している（立命館ARC所蔵、arcMD01-0001）。またその直前の「五」～「八」丁も、先ほど匡郭寸によって見たように、一枚の板木に収まっていたと見られることから、これも巻の冒頭から1丁ずつ板木を収めているようである。したがって、半端になった巻末2丁分を、別の巻の板木の空きスペースに含めた結果が、T1033なのだろう。巻之二の3丁分の匡郭高は、むしろ巻之二のそれ以前の丁に近く、巻之七の1丁分についても、むしろ巻之二のそれ以前の丁に近い。その他の出現パターンによって、底本が四丁張の板木で仕立てられていたことは推定できるが、どの4丁が一枚の板木に含まれていたかまで明らかにはできない。

【表13】『醉古堂劍掃』匣郭縦寸一覽表(単位cm)

冊	卷	丁付	匣郭高	板木 No.
一	卷之二	七	15.2	T1039
一	卷之二	八	15.2	T1039
一	卷之二	九	15.3	T1033
一	卷之二	十	15.2	T1033
一	卷之二	十一	15.2	T1033
一	卷之三	一	15.1	欠
一	卷之三	二	15.2	欠
一	卷之三	三	15.2	欠
一	卷之三	四	15.2	欠
一	卷之三	五	15.2	T1038
一	卷之三	六	15.3	T1038
一	卷之三	七	15.3	T1038
一	卷之三	八	15.3	T1038
一	卷之三	九	15.1	欠
一	卷之三	十	15.1	欠
一	卷之三	十一	15.1	欠
一	卷之四	一	15.1	欠
一	卷之四	二	15.2	欠
一	卷之四	三	15.2	欠
一	卷之四	四	15.1	欠
一	卷之四	五	15.2	欠
一	卷之四	六	15.2	欠
一	卷之四	七	15.2	欠
一	卷之四	八	15.2	欠
一	卷之四	九	15.1	欠
一	卷之四	十	15.1	欠
一	卷之四	十一	15.2	欠
一	卷之四	十二	15.2	欠
一	卷之四	十三	14.9	欠
一	卷之四	十四	14.9	欠
一	卷之四	十五	14.9	欠
一	卷之四	十六	14.9	欠
一	卷之四	十七	15.1	欠
一	卷之四	十八	15.1	欠
一	卷之四	十九	15.1	欠
一	卷之五	一	15.2	欠
一	卷之五	二	15.2	欠
一	卷之五	三	15.2	欠
一	卷之五	四	15.2	欠
一	卷之五	五	15.2	T1047
一	卷之五	六	15.2	T1047
一	卷之五	七	15.1	T1047
一	卷之五	八	15.2	T1047
一	卷之五	九	15.1	T1032
一	卷之五	十	15.1	T1032
一	卷之五	十一	15.1	T1032
一	卷之五	十二	15.1	T1032
一	卷之五	十三	15.0	T1053
一	卷之五	十四	15.0	T1053
一	卷之五	十五	15.0	T1053
一	卷之五	十六	15.0	T1053
一	卷之五	十七	15.1	T1040
一	卷之五	十八	15.1	T1040
一	卷之五	十九	15.1	T1040
一	卷之五	二十	15.1	T1040
一	卷之五	二十一	15.0	T1031
一	卷之五	二十二	15.0	T1031

冊	卷	丁付	匣郭高	板木 No.
一	卷之一	序一	14.9	欠
一	卷之一	序二	14.9	欠
一	卷之一	序三	14.9	欠
一	卷之一	一	15.1	欠
一	卷之一	二	15.1	欠
一	卷之一	三	15.2	欠
一	卷之一	四	15.1	欠
一	卷之一	五	15.2	欠
一	卷之一	六	15.1	欠
一	卷之一	七	15.1	欠
一	卷之一	八	15.1	欠
一	卷之一	九	15.0	欠
一	卷之一	十	15.0	欠
一	卷之一	十一	15.0	欠
一	卷之一	十二(叙)	15.9	欠
一	卷之一	十三(叙)	15.9	欠
一	卷之一	十四(叙)	15.8	欠
一	卷之一	十五	15.3	欠
一	卷之一	十六	15.3	欠
一	卷之一	十七	15.0	欠
一	卷之一	十八	15.0	欠
一	卷之一	十九	15.0	欠
一	卷之一	二十	15.1	欠
一	卷之一	廿一	15.1	欠
一	卷之一	廿二	15.0	欠
一	卷之一	廿三	15.1	欠
一	卷之一	廿四	15.1	欠
一	卷之一	廿五	15.2	欠
一	卷之一	一	15.2	欠
一	卷之一	二	15.2	欠
一	卷之一	三	15.1	欠
一	卷之一	四	15.2	欠
一	卷之一	五	15.1	欠
一	卷之一	六	15.0	欠
一	卷之一	七	14.9	欠
一	卷之一	八	14.9	欠
一	卷之一	九	14.9	欠
一	卷之一	十	14.9	欠
一	卷之一	十一	14.9	欠
一	卷之一	十二	14.9	欠
一	卷之一	十三	14.8	欠
一	卷之一	十四	14.9	欠
一	卷之一	十五	14.9	欠
一	卷之一	十六	14.9	欠
一	卷之一	十七	15.2	欠
一	卷之一	十八	15.2	欠
一	卷之一	十九	15.1	欠
一	卷之一	廿	15.2	欠
一	卷之一	二十一	15.2	欠
一	卷之一	廿二	15.1	欠
一	卷之一	廿三	15.1	欠
一	卷之二	一	15.1	欠
一	卷之二	二	15.1	欠
一	卷之二	三	15.2	欠
一	卷之二	四	14.9	欠
一	卷之二	五	15.2	T1039
一	卷之二	六	15.2	T1039

冊	卷	丁付	匡郭高	板木 No.
二	卷之十	十	14.8	欠
二	卷之十	十一	14.8	欠
二	卷之十	十二	14.8	欠
二	卷之十一	一	14.8	欠
二	卷之十一	二	14.8	欠
二	卷之十一	三	14.8	欠
二	卷之十一	四	14.8	欠
二	卷之十一	五	15.0	欠
二	卷之十一	六	15.0	欠
二	卷之十一	七	15.0	欠
二	卷之十一	八	15.0	欠
二	卷之十一	九	15.0	欠
二	卷之十一	十	14.9	欠
二	卷之十一	十一	14.9	欠
二	卷之十一	十二	14.9	欠
二	卷之十二	一	15.0	欠
二	卷之十二	二	15.0	欠
二	卷之十二	三	15.0	欠
二	卷之十二	四	15.0	欠
二	卷之十二	五	14.8	欠
二	卷之十二	六	14.8	欠
二	卷之十二	七	14.8	欠
二	卷之十二	八	14.9	欠
二	卷之十二	九	14.9	欠
二	卷之十二	十	14.9	欠
二	卷之十二	十一	14.7	欠
二	卷之十二	十二	14.7	欠
二	卷之十二	十三	14.9	欠
二	卷之十二	十四	14.8	欠
二	卷之十二	十五	14.8	欠
二	卷之十二	十六	14.8	欠
二	卷之十二	十七	14.8	欠
二	卷之十二	十八	15.0	欠
二	卷之十二	十九	15.2	欠
二	卷之十二	二十	15.3	欠
二	卷之十二	廿一	15.3	欠

冊	卷	丁付	匡郭高	板木 No.
一	卷之五	二十三	14.9	T1031
一	卷之五	二十四	14.9	T1031
二	卷之六	一	14.8	欠
二	卷之六	二	15.0	欠
二	卷之六	三	15.0	欠
二	卷之六	四	15.2	欠
二	卷之六	五	15.0	欠
二	卷之六	六	15.1	欠
二	卷之六	七	14.8	欠
二	卷之六	八	15.0	欠
二	卷之六	九	15.0	欠
二	卷之六	十	15.0	欠
二	卷之六	十一	14.8	欠
二	卷之六	十二	14.8	欠
二	卷之六	十三	14.8	欠
二	卷之七	一	15.0	欠
二	卷之七	二	14.9	欠
二	卷之七	三	15.0	欠
二	卷之七	四	15.0	欠
二	卷之七	五	14.8	欠
二	卷之七	六	14.8	欠
二	卷之七	七	14.8	欠
二	卷之七	八	14.8	欠
二	卷之七	九	15.0	arcMD01-0001
二	卷之七	十	15.0	arcMD01-0001
二	卷之七	十一	15.0	arcMD01-0001
二	卷之七	十二	15.0	arcMD01-0001
二	卷之七	十三	15.0	T1033
二	卷之七	十四	14.8	欠
二	卷之八	一	14.8	欠
二	卷之八	二	14.8	欠
二	卷之八	三	14.8	欠
二	卷之八	四	14.8	欠
二	卷之八	五	15.0	欠
二	卷之八	六	15.0	欠
二	卷之八	七	14.9	欠
二	卷之八	八	14.9	欠
二	卷之九	一	14.8	欠
二	卷之九	二	14.9	欠
二	卷之九	三	14.8	欠
二	卷之九	四	14.8	欠
二	卷之九	五	14.7	欠
二	卷之九	六	14.7	欠
二	卷之九	七	14.7	欠
二	卷之九	八	14.7	欠
二	卷之九	九	14.9	欠
二	卷之九	十	14.9	欠
二	卷之九	十一	14.9	欠
二	卷之十	一	14.9	欠
二	卷之十	二	14.9	欠
二	卷之十	三	14.9	欠
二	卷之十	四	14.9	欠
二	卷之十	五	14.7	欠
二	卷之十	六	14.8	欠
二	卷之十	七	14.8	欠
二	卷之十	八	14.8	欠
二	卷之十	九	14.8	欠

ここまでは全て四丁張の板木を見てきたが、二丁張や六丁張、八丁張の板木はどのようなになっているのだろうか。

『校本文後集』

底本は立命館ARC所蔵本 (arcBK01-0021、大本2冊)。安政五年(一八五八)刊。卷之上表紙見返しに「皇都書林 文徳堂／江戸書林 千鐘房／発兌」、卷之下奥付に「三都書物問屋／江戸日本橋通二丁目 須原屋茂兵衛／同 通二丁目 山城屋佐兵衛／同 通四丁目 須原屋佐助／同 両国横山町一丁目 出雲寺万次郎／同 両国横山町三丁目 和泉屋金右衛門／同 浅草茅町二丁目 須原屋伊八／同 柴神明前 岡田屋嘉七／大阪心齋橋南江二丁目 敦賀屋九兵衛／同心齋橋安堂町 秋田

屋太右衛門／京都寺町通松原下ル 勝村治右衛門版」。二丁張の板木十枚が現存。

【表14】によれば、底本について顕著であるのは、卷之上「十七」～「十八」丁が前後の丁と比較して2mm小さくなっている他、卷之下「十一」～「十二」丁が前後の丁と比較して3～4mmも小さくなっている点、卷之下「四十七」～「四十八」が前後の丁と比較して3mm程度小さい点などである。二丁張の板木によって摺刷された板本は、結果的に匡郭高低差の出現パターンが2の倍数、つまり4丁分の単位で出現することがあり、一見判断が難しい場合があるが、やはりよく見ると2丁分の高低差パターンが表れる。

【表14】『校本文後集』匡郭縦寸一覧表(単位cm)

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之上	序	21.6	欠
卷之上	引書目乙	21.0	欠
卷之上	目録一	21.1	欠
卷之上	目録二	21.1	欠
卷之上	一	21.4	欠
卷之上	二	21.4	欠
卷之上	三	21.2	欠
卷之上	四	21.2	欠
卷之上	五	21.4	欠
卷之上	六	21.3	欠
卷之上	七	21.4	欠
卷之上	八	21.3	欠
卷之上	九	21.4	欠
卷之上	十	21.4	欠
卷之上	十一	21.3	欠
卷之上	十二	21.2	欠
卷之上	十三	21.1	欠
卷之上	十四	21.1	欠
卷之上	十五	21.2	N0228
卷之上	十六	21.2	N0228
卷之上	十七	21.0	N0232
卷之上	十八	21.0	N0232
卷之上	十九	21.2	欠
卷之上	二十	21.2	欠
卷之上	二十一	21.2	欠
卷之上	二十二	21.3	欠
卷之上	二十三	21.2	欠
卷之上	二十四	21.3	欠
卷之上	二十五	21.2	N0229
卷之上	二十六	21.3	N0229
卷之上	二十七	21.3	欠
卷之上	二十八	21.2	欠
卷之上	二十九	21.3	欠
卷之上	三十	21.2	欠
卷之上	三十一	21.1	欠
卷之上	三十二	21.1	欠
卷之上	三十三	21.2	N0230
卷之上	三十四	21.1	N0230
卷之上	三十五	21.2	欠
卷之上	三十六	21.2	欠
卷之上	三十七	21.3	欠
卷之上	三十八	21.3	欠
卷之上	三十九	21.3	欠
卷之上	四十	21.3	欠
卷之上	四十一	21.2	欠
卷之上	四十二	21.1	欠
卷之上	四十三	21.2	欠
卷之上	四十四	21.2	欠
卷之上	四十五	21.3	N0231
卷之上	四十六	21.2	N0231
卷之下	一	21.4	欠
卷之下	二	21.4	欠

卷	丁付	匡郭高	板木 No.
卷之下	三	21.3	欠
卷之下	四	21.3	欠
卷之下	五	21.4	欠
卷之下	六	21.4	欠
卷之下	七	21.4	欠
卷之下	八	21.3	欠
卷之下	九	21.4	欠
卷之下	十	21.4	欠
卷之下	十一	21.1	欠
卷之下	十二	21.1	欠
卷之下	十三	21.5	欠
卷之下	十四	21.5	欠
卷之下	十五	21.4	T1733
卷之下	十六	21.4	T1733
卷之下	十七	21.4	欠
卷之下	十八	21.5	欠
卷之下	十九	21.5	N0233
卷之下	二十	21.5	N0233
卷之下	二十一	21.4	欠
卷之下	二十二	21.5	欠
卷之下	二十三	21.2	欠
卷之下	二十四	21.1	欠
卷之下	二十五	21.1	欠
卷之下	二十六	21.2	欠
卷之下	二十七	21.5	欠
卷之下	二十八	21.4	欠
卷之下	二十九	21.1	欠
卷之下	三十	21.1	欠
卷之下	三十一	21.2	欠
卷之下	三十二	21.2	欠
卷之下	三十三	21.3	N0234
卷之下	三十四	21.2	N0234
卷之下	三十五	21.2	T1476
卷之下	三十六	21.1	T1476
卷之下	三十七	21.1	欠
卷之下	三十八	21.1	欠
卷之下	三十九	21.3	欠
卷之下	四十	21.4	欠
卷之下	四十一	21.2	欠
卷之下	四十二	21.2	欠
卷之下	四十三	21.5	N0235
卷之下	四十四	21.4	N0235
卷之下	四十五	21.5	欠
卷之下	四十六	21.5	欠
卷之下	四十七	21.2	欠
卷之下	四十八	21.2	欠
卷之下	四十九	21.5	欠
卷之下	五十	21.4	欠
卷之下	跋	21.4	欠
卷之下	跋	21.1	欠

『夢合早占大成』

底本は立命館ARC所蔵本 (arcBK04-0076、小本1冊)。原題簽「夢合早占大成 全」。裏表紙見返しに「藤井佐兵衛」の蔵板目録が付く。該書は寛政七年(一七九五)刊『占夢早考』の改題本。序文に「題占夢早考」とあるが、板木内題に入木が施されており、また柱題「占夢早考」の「占」を削除した痕跡が残る。六丁張の板木が九枚現存している。

【表15】を見れば、「六十九」～「百二丁」(終丁)の丁までの35丁分の

範囲に顕著なように、匡郭高の高い箇所と低い箇所が、6丁分を単位として交互に出現している。なお「九十八」～「百二丁」は5丁分しかないが、該当箇所の板木(F0034)の空きスペースには奥付が彫られており、本文は5丁分しかない。

【表15】『夢合早占大成』匡郭縦寸一覧表(単位cm)

丁付	匡郭高	板木 No.
序ノ一	12.1	F0033
序ノ二	11.9	F0033
序ノ三	12.0	F0033
序ノ四	12.1	F0033
序ノ五	12.1	F0033
序ノ六	12.1	F0033
序ノ七	12.0	F0102
序ノ八	12.0	F0102
序ノ九	11.9	F0102
序ノ十	12.0	F0102
序ノ十一	11.9	F0102
序ノ十二	12.2	F0102
序ノ十三	12.2	F0100
序ノ十四	12.2	F0100
序ノ十五	12.1	F0100
序ノ十六	12.3	F0100
一丁	11.8	F0100
二丁	11.8	F0100
三丁	11.6	F0103
四丁	11.6	F0103
五丁	11.7	F0103
六丁	11.7	F0103
七丁	11.6	F0103
八丁	11.7	F0103
九丁	11.9	欠
十丁	11.8	欠
十一	11.8	欠
十二	11.8	欠
十三	11.8	欠
十四	11.8	欠
十五	11.7	欠
十六	11.7	欠
十七	11.8	欠
十八	11.8	欠
十九	11.7	欠
二十	11.8	欠
二十一	11.9	欠
二十二	11.9	欠
二十三	11.9	欠
二十四	11.9	欠
二十五	11.9	欠
二十六	11.9	欠
二十七	11.9	欠
二十八	11.9	欠
二十九	11.9	欠
三十	11.8	欠
三十一	12.0	欠
三十二	11.9	欠
三十三	11.6	F0106
三十四	11.7	F0106
三十五	11.7	F0106
三十六	11.6	F0106
三十七	11.7	F0106
三十八	11.7	F0106
三十九	11.7	欠
四十	11.7	欠
四十一	11.7	欠
四十二	11.7	欠
四十三	11.7	欠
四十四	11.7	欠

丁付	匡郭高	板木 No.
四十五	11.8	F0104
四十六	11.8	F0104
四十七	11.7	F0104
四十八	11.8	F0104
四十九	11.8	F0104
五十	11.8	F0104
五十一	11.9	欠
五十二	11.9	欠
五十三	11.9	欠
五十四	12.0	欠
五十五	12.0	欠
五十六	11.8	欠
五十七	11.7	欠
五十八	11.7	欠
五十九	11.7	欠
六十	11.7	欠
六十一	11.7	欠
六十二	11.6	欠
六十三	11.8	F0101
六十四	11.9	F0101
六十五	11.8	F0101
六十六	11.8	F0101
六十七	11.8	F0101
六十八	11.7	F0101
六十九	11.7	欠
七十	11.7	欠
七十一	11.7	欠
七十二	11.7	欠
七十三	11.8	欠
七十四	11.7	欠
七十五	12.0	欠
七十六	12.0	欠
七十七	12.0	欠
七十八	12.0	欠
七十九	12.0	欠
八十	12.0	欠
八十一	11.8	欠
八十二	11.7	欠
八十三	11.7	欠
八十四	11.7	欠
八十五	11.7	欠
八十六	11.7	欠
八十七	11.9	欠
八十八	12.0	欠
八十九	12.0	欠
九十	11.9	欠
九十一	11.9	欠
九十二	11.9	欠
九十三	11.8	F0105
九十四上	11.7	F0105
九十四下	11.7	F0105
九十五	11.7	F0105
九十六	11.7	F0105
九十七	11.8	F0105
九十八	11.9	F0034
九十九	11.9	F0034
百丁	11.9	F0034
百一丁	11.8	F0034
百二丁	11.9	F0034

『弘安礼節』

底本は京都大学附属総合図書館所蔵本(大惣本02・03コ6、中本1冊)。原題簽「弘安礼節」。奥付に「平安寺町通姉小路北／佐々木惣四郎」。万治三年版の後摺本である。八丁張の板木三枚が現存している(揃)。底本の書型は中本であるが、匡郭寸から考えれば、板木は小本用に仕立てられている。また題簽は『諷題三詠』の袋板と一緒にT2317に彫られている。

【表16】によれば、最初の「一」～「十六」丁までは、匡郭高にばらつきがあるが、11.6cm前後で一定している。しかし「十七」～「二十四」丁までは明らかに「十六」丁までの匡郭高に比べて、一段低くなっている。丁付と匡郭寸のみによれば、八丁張の板木によって摺られたことが匡郭寸法に表れていると見ることもできる。

しかし表によって明らかのように、該書の板木は「九」から「二十四」丁までの16丁分が二枚の板木にばらばらに割り振られている。したがって「十六」～「二十四」丁の匡郭縦寸が均一性を持った原因を板木に求めることは不可能である。『好古日録』や『醉古堂劍掃』で確認した例と同様、匡郭縦寸が板木単位ではなく、丁順の近い丁に近似している例

といえよう。

【表16】『弘安礼節』匡郭縦寸一覧表(単位cm)

丁付	匡郭高	板木 No.
一	11.6	T1125
二	11.6	T1125
三	11.6	T1125
四	11.6	T1125
五	11.6	T1125
六	11.7	T1125
七	11.6	T1125
八	11.7	T1125
九	11.5	T1115
十	11.6	T1115
十一	11.6	T1115
十二	11.6	T1130
十三	11.5	T1115
十四	11.7	T1130
十五	11.7	T1130
十六	11.5	T1130
十七	11.4	T1130
十八	11.4	T1130
十九	11.4	T1130
二十	11.4	T1130
二十一	11.4	T1115
二十二	11.4	T1115
二十三	11.4	T1115
二十四	11.4	T1115

さて、板木の構成という視点だけでは捉えきれない事例もあったが、ひとまず匡郭縦寸の出現パターンを調査することにより、その板本が何丁張の板木で摺刷されたのかを推定する方法を試みた。この方法に蓋然性があるか否か、紙質の出現パターンを見た『和歌麿の塵』について、匡郭高を測定してみよう。以下、紙質の出現パターンが特徴的であると見た中冊から下冊にわたる下巻「七六」～「百十八」丁について、紙質とともに匡郭縦寸を【表17】に掲出する。

【表17】『和歌麿の塵』底本 紙質・匡郭縦寸対照表（部分、単位cm）

冊	巻	丁付	紙質	匡郭高
中	下	七六	A	13.7
中	下	七三	A	13.7
中	下	七四	A	13.7
中	下	七五	A	13.7
中	下	七七	C	13.5
中	下	七八	C	13.4
中	下	七九	C	13.4
中	下	八十	C	13.3
中	下	八一	B	13.8
中	下	八二	B	13.8
中	下	八三	B	13.8
中	下	八四	B	13.7
中	下	八五	C	14.1
中	下	八六	C	14.1
下	下	八七	A	13.7
下	下	八八	A	13.8
下	下	八九	A	13.8
下	下	九十	A	13.7
下	下	九一	B	13.8
下	下	九二	B	13.8
下	下	九三	B	13.7
下	下	九四	B	13.7
下	下	九五	C	14.0

冊	巻	丁付	紙質	匡郭高
下	下	九六	C	14.0
下	下	九七	C	14.0
下	下	九八	C	14.0
下	下	九九	C	14.0
下	下	百	C	14.0
下	下	百一	C	14.1
下	下	百二	C	14.0
下	下	百三	B	13.4
下	下	百四	B	13.2
下	下	百五	B	13.2
下	下	百六	B	13.2
下	下	百七	D	13.6
下	下	百八	D	13.7
下	下	百九	D	13.6
下	下	百十	D	13.7
下	下	百十一	C	13.6
下	下	百十二	C	13.6
下	下	百十三	C	13.6
下	下	百十四	C	13.6
下	下	百十五	D	13.4
下	下	百十六	D	13.5
下	下	百十七	D	13.6
下	下	百十八	D	13.6

こうしてみれば、『和歌麿の塵』の紙質出現パターンと匡郭の高低差の出現パターンはほぼ一致を見せるのであり、紙質または匡郭の高低差から板木の構成を導き出す手法には蓋然性が認められるということになるだろう。

(2) 板下の匡郭

なぜ前項に示したような高低差が発生するのだろうか。例は少ないが、現存の板木の中には、板下用の匡郭・罫線と思われるものがある。いずれも明治期のものであるが、T1932、T2040（明治十四年刊『山

陽詩鈔集解』、図17～18）とT1773、T1604（明治十年刊『続文章軌範纂評』、図20、22）の4点が現存している。

『山陽詩鈔集解』の板木には、下の小黒口に「三宅氏蔵」と陰刻がある。T1932は裏面が未刻、T2040の裏面には匡郭があるが、匡郭に装飾が施されており、用途は別と思われる（図19）。『続文章軌範纂評』については、T1773の裏面に奥付が彫られているが（図21）、『続文章軌範纂評』のものではない。この奥付を付す板本に行き当たっていないが、特定の板本に用いる奥付ではなく、一般的に裏表紙見返しに付して複数の本に流用可能なもののように見受けられる。T1604は裏面が未刻である。匡郭、罫線、柱題が彫られており、巻数は「巻之」までが彫られている。丁付はない。

『続文章軌範纂評』の例が分かりやすいが、丁付がなく、巻名を「巻之」までとしている点、本文のどの丁にも流用可能とすることを意図したのだろう。図版掲出の用意がないが、藤井文政堂には『続煎茶要覧』の板下本が所蔵されており、匡郭・罫線は摺りである。何度も同じ匡郭・罫線・柱題を板下として書くのは非合理的であることから考えて、多くの場合、板下は、板下用の板木を用いて匡郭・罫線・柱題を摺刷していたと考えるのが自然である。

これらを板下用の板木と認定することができるならば、板下段階では匡郭寸がほぼ一定になるはずであり、最終的な摺刷においても匡郭高はほぼ一定にならなければならない。しかし、先に事例を列挙したように、この仮定は通用しない。それでは、匡郭自体にも通常1～2mmの太さがあるとして、彫りの段階で板木ごとに匡郭を太く残したり、細く彫りあげたりした彫りの揺れに起因するのだろうか。しかし上述の例に散見されるのとおり、匡郭の高低差にはそれ以上の差異が発生しており、彫り方の違いのみを理由に考えることはできない。そのメカニズムを明らかに

するためには、木材としての板木に注目する必要がある。



図18 『山陽詩鈔集解』板下用板木 (T2040 表、奈良大学博物館所蔵、鏡像、部分)



図17 『山陽詩鈔集解』板下用板木 (T1932、奈良大学博物館所蔵、鏡像、部分)

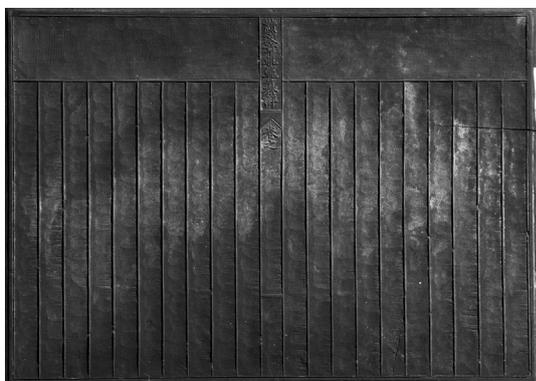


図20 『続文章軌範纂評』板下用板木 (T1773 表、奈良大学博物館所蔵、鏡像、部分)

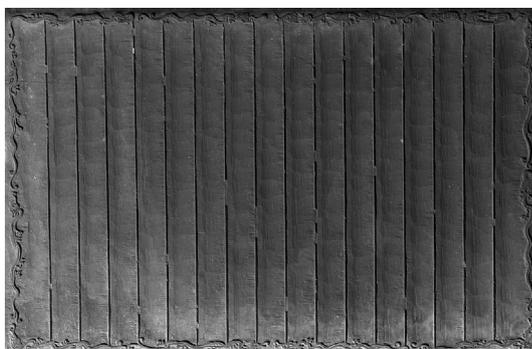


図19 板下用板木 (T2040 裏、奈良大学博物館所蔵、鏡像、部分)

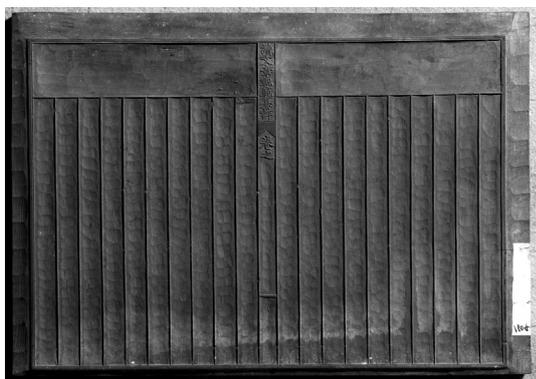


図22 『続文章軌範纂評』板下用板木 (T1604 表、奈良大学博物館所蔵、鏡像、部分)



図21 奥付用板木 (T1773 裏、奈良大学博物館所蔵、鏡像、部分)

3 木材としての板木——木材乾燥と収縮——

廣庭基介氏・長友千代治氏は、

板木は日本では桜の木を使い、板目にとり、両端の木口には板の反を防ぐために端食をかませる。板は表裏とも二、三丁分、横に連続して使う。桜材が使われる理由は、生木の削りたては柔らかくて卵色に白く、彫刻に適し、時間がたつと赤味をおびて硬くなり、摺刷に好都合となる。

と述べられる⁽¹⁶⁾。板目材は、丸太の周囲から材を切り出したもので、一つの丸太から、丸太を囲むように数枚の採取が可能である⁽¹⁷⁾。

さて、木材には三つの方向がある。一つめは半径方向と呼ばれ、丸太を想像すれば分かりやすいが、丸木の周囲と中心とを結ぶ方向である。

二つめは繊維方向と呼ばれ、繊維が伸びる方向、つまり木が成長によって伸びる方向を指す。三つ目は接線方向と呼ばれ、繊維方向と直角に交わる方向を指している。板木が板目材であるとして、このうち、版面に影響が出る接線方向と繊維方向の二方向を板木に当てはめたものが図23である。

この三方向は木材が乾燥するのに従って膨張・収縮するが、その膨張率・収縮率は三方向で大きく異なる。寺澤眞氏によれば、一本の丸太から採取した材であっても、部位によって収縮率は異なるため、ここでは同氏が提示された「収縮経過の違いの模式図」(図24)⁽¹⁸⁾によって三方向の収縮率の違い

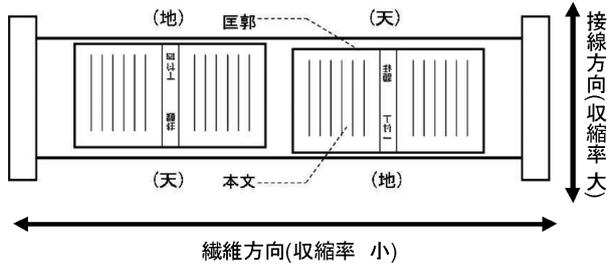


図23 板木(板目材)の方向

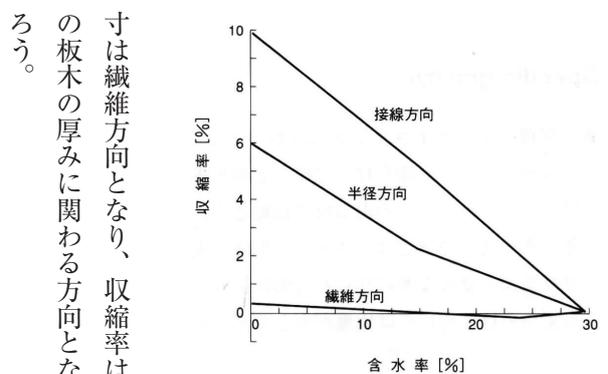


図24 寺澤眞氏「収縮経過の違いの模式図」

を見る。これによれば、接線方向の収縮率が最も高く、次いで半径方向の収縮率が高く、繊維方向の収縮率は他の二方向に比較すれば極めて小さいようである。

図23に戻り、この収縮率の違いを板木に当てはめれば、丁の縦方向、つまり匡郭の縦寸方向が接線方向にあたり、収縮率が大きくなる。丁の横方向、つまり匡郭の横寸は繊維方向となり、収縮率は小さい。半径方向は収縮率が高いものの板木の厚みに関わる方向となり、版面の収縮には大きく影響しないだろう。

前節において、板本の板木の構成に則して匡郭縦寸に高低差が生じている現象を確認した。その原因は、板木に用いられた材の接線方向の収縮率の異なるのではないだろうか。匡郭縦寸の高低差と木材収縮を関連づける理由はもう一つある。先述のように『和歌麿の塵』の匡郭縦寸には高低差が認められた。先の表には匡郭横寸を掲出しなかったが、縦寸に高低差が認められても、横寸は9.5〜9.6cmとほぼ一定である。横寸が一定であるのに対し、縦寸に大きな高低差が発生するということは、接線方向と繊維方向の収縮率の違いによるものと見るべきなのではないか。

また、青木賜鶴子氏による『源氏物語評釈』の全丁採寸調査によれば、板木と板本の匡郭の横寸を比較した場合、板木のほうが大きい例が認められるとのことである⁽¹⁹⁾。図24によれば、匡郭の横寸すなわち板木の繊維方向は、繊維方向では含水率20〜30パーセント未満のレベルにおいて膨張するとされており、『源氏物語評釈』の板木はこれに関わって起こっ

た現象と思われる。

以上、木材の収縮という観点から、板本の匡郭縦寸に高低差が発生するメカニズムを検証した。前節では、板本の匡郭縦寸からその板本を摺刷した板木が何丁張だったかを推定できるということ、板下の匡郭が摺刷されたものであり、板下段階では匡郭寸法がほぼ一定だったと思われることの二点を確認しておいた。板下の匡郭寸法がほぼ一定であるのに、最終的に板木ごとに匡郭縦寸が異なってくるということから、板木を仕立てる際には寸法が安定しない材、つまり一点の板本に関わる板木の含水率がもと均一ではなかった、または異なる丸太から切り出された材が混在している、あるいは同一の丸太から切り出されたが、部位が異なるために収縮率の誤差が出た、などの理由から、各板木の収縮率に違いが生じ、最終的にはそれらが板本の匡郭縦寸の高低差が発生する第一の理由になっていると考えられるのである。

この理論は覆刻における匡郭寸の収縮にも当てはまるように思われる。従来、覆刻による版面収縮のメカニズムは、例えば、

覆刻版は版面が収縮する。版下は数写しであるから版下も同寸になるが、板木に貼ってからは乾燥して収縮する。縮小幅は半紙本で数耗になる。

のように解説されてきた。²¹⁾つまり板下の収縮が版面収縮の原因と見なされてきたのである。

いま筆者はそれを科学的に否定する材料を持っているわけではなく、板下の収縮を原因とみることを完全に否定するつもりはない。しかし、原版の丁をそのまま板下に用いたり、謄写や臨模に近い形で板下を作成するなどして、含水率の高い新しい板に貼り付けて彫れば、板木の乾燥に伴って版面、特に木材の接線方向に相当する縦寸は大きく収縮し、必然的に原版の版面よりも、覆刻の版面のほうが収縮するだろう。覆刻に

見られる版面収縮は、板下の収縮よりもむしろ、板木の収縮を原因と捉えるべきなのではないだろうか。

このように木材収縮の理論は、板本上に表れる別の現象に対する理解に対しても有効であり、板木毎に匡郭縦寸が数mm単位で異なってくる現象を、木材収縮の理論によって理解することの妥当性を示すと考えられる。ただし「丁飛ばし」や、板木にすっきりと収まらない丁を組み合わせてある板木の事例を見ると、必ずしもこの理論だけでは説明できない。『好古日録』や『醉古堂劍掃』、『弘安礼節』の事例では、同じ板木に収まっている丁と匡郭縦寸が近似せず、丁順の近い丁に近似するという例が認められた。これらの例は、一点の板本における匡郭の縦寸の異なるの要因を、板木の収縮だけに求めることができないことを示すのだろう。つまりもともと複数の板下用匡郭があり、板下の時点で一枚の板木に収まる丁の匡郭縦寸が幾分異なっていたことを意味すると思われる。

逆に、『好古小録』『和漢研譜』では、丁順の近い丁よりも、同じ板木に収まっている丁と匡郭縦寸が近似する例が認められた。これらは上述の木材収縮の理論で説明が付く。しかし『好古日録』や『醉古堂劍掃』の事例をも参考にした上で、複数の板下用板木があり、その時点で匡郭縦寸が幾分異なっていたとすると、板下作成以前にあらかじめどの丁をどの板木に収めるかが決まっており、同じ板木に収める丁には、同一の板下用板木で摺刷した匡郭を選んで使用したと考えざるを得ないだろう。

第1節において紹介したように、「丁飛ばし」は版權の分割所有一およびそれに伴う板木の分割所有一に関わって編み出された板木の仕立てられ方である。板下作成以前にどの丁をどの板木に収めるかが決まっていたとするならば、板下作成以前に板前のみならず、板木ひいては版權をどのように分割所有するかまで、ある程度決まっていたことになる。

本稿で掲出した事例だけでこの点を明らかにすることは困難であり、なお後考を俟つ必要がある。本稿における試論は、板本上に表れる現象の理解に役立つだけではなく、近世出版における一点の板本の出版過程を少しく明らかにする可能性を内包している。

おわりに

近代に入って摺られた近世以前成立の板本を指す語に「明治摺」や「近代摺」がある。本稿中でも使用した語であるが、これらは概して摺りが悪く、紙質の混在に至っては、本の作りが杜撰であるという誹りを免れず、文化遺産としての価値は低い。しかし杜撰な作りゆえに、近代摺が物語る事実がある。

第1節では、紙質の混在という近代摺の杜撰さを逆手に取って、その本を摺刷した板木が何丁張であったのかを知る手がかりとした。そこには文化遺産としての価値以外に、近代摺の学術的な価値が認められる。諸本を網羅的に扱う中で、初摺の善本を博搜する努力は必要である。しかし板本書誌学に「板本書誌学」を取り入れようとする場合、常に有用な情報が得られるとは限らないが、近代摺の板本は、少なくとも現在以上に重要視されるべきであろう。

第2節では、採寸結果の羅列に終始した感があるが、匡郭寸法の出現パターンを見る手法は、板木という存在を強く意識して板本を観察したからこそ導き出した視点である。「板木」という存在、板本が木材によって摺刷されたものであることを念頭に板本を観察するとき、板木が二丁張だったと思われるのか、四丁張か、六丁張か、匡郭縦寸の出現パターンがその示唆を与えてくれることは、本稿で提示した調査結果により、

ほぼ疑いを容れない。ただし本稿では板本の匡郭高の採寸に終始し、現存板木の匡郭高の採寸まで調査が及んでいない。⁽²⁾この問題は本来、板本の両者を同時に扱った上で検討すべきであり、その上で今後本稿全体の再検討を行う必要がある。

第3節では、匡郭縦寸に高低差が表れることの原因を、木材収縮の特性に求めた。冒頭に紹介した『おくのほそ道』蛤本には匡郭がないが、同様の事例が、匡郭が備わり、かつ板木の現存しない板本上に表れた場合には、本稿で述べた方法論がきつと有効に作用するはずである。

板本の書誌調査を行うにあたり、常に全丁の匡郭寸を採寸することは合理的ではない。作業量は膨大であり、それが常に必要な情報を提供してくれる確証もない。今回の調査では、数値によって比較するよりも、原本を手にとって観察した方が、かえって匡郭の高低差グループを把握しやすいという実感もあった。全丁の匡郭を採寸することまでしなくとも、何かしら板木の構成を考慮すべき事例に行き当たった際には、板本を閉じて、板心側から眺めてみることもあって良いのではないだろうか。

本稿は、「板本書誌学」の構築にあたり、異なる紙質・匡郭の高低差の出現パターンを板本観察手法の一つとして提示するものである。また第3節の末尾に述べたように、この観察方法が板本上に表れた現象の理解にとどまらず、近世出版における出版過程の一端を明らかにする可能性を主張した。

〔注釈〕

(1) 拙稿「板本の板木―その基本的構造」(アート・ドキュメンテーション研究 17, 2010)

(2) 永井一彰『おくのほそ道』蛤本の謎」(奈良大学総合研究所所報9、

- 二〇〇一)
- (3) 拙稿「賞奇軒墨竹譜」の板木」(アトリサーチ10、二〇一〇)
 - (4) 木村三四吾「『冬の日』初版本考」(木村三四吾著作集I『俳書の変遷—西鶴と芭蕉』、一九九八、八木書店)
 - (5) 木村三四吾「『春の日』初版本考」(2)の木村氏著書に所収)
 - (6) 黒丸点は完全な中黒ではなく、中央にわずかな白抜きが見られる場合もあるが、白丸点とは明確に区別可能なため、本稿では黒丸点と称した。また、二十九ウは白丸・黒丸が混在しているが、黒丸を基調としている。
 - (7) 拙稿「板木デジタルアーカイブ構築と近世出版研究への活用」(赤間亮・富田美香編『イメージデータベースと日本文化研究』、二〇一〇、ナカニシヤ出版)
 - (8) 国文学研究資料館「日本古典籍総合目録」(<http://basel.nijl.ac.jp/~koten/about.html>)
 - (9) 永井一彰「板木の分割所有」(奈良大学総合研究所報17、二〇〇九)
 - (10) (3)の拙稿参照。
 - (11) 木村三四吾「『西鶴織留』諸版考」(木村三四吾著作集III『近世版本考』、一九九八、八木書店)
 - (12) 後摺本における版面収縮については、(11)の文献では示唆にとどまり、(4)などの文献で言及されている。
 - (13) (1)の拙稿において指摘したことがある。
 - (14) 該書とその板木については(3)の拙稿に詳述したことがあるが、現存する「三十三」〜「三十六」丁の板木は底本と一致しないため、表5では「欠」とした。
 - (15) (2)に指摘がある。
 - (16) 廣庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』(一九九八、世界思想社)
 - (17) 板木が板目に取られていたことは、(1)の拙稿で指摘したように、木の節(枝の痕跡)が刻面に表れていることから明らかである。
 - (18) 寺澤眞『木材乾燥のすべて改訂増補版』(二〇〇四、海青社)。
 - (19) (18)の寺澤氏著書より転載。
 - (20) 青木賜鶴子「萩原広道『源氏物語評釈』の版本と出版」(上方文化研究センター研究年報10、二〇〇九)
 - (21) (16)に同じ。

(22) 板木の匡郭寸については、現在調査を進めている。板木の匡郭高は、板本に比して1〜2mm小さい傾向が認められる。

〔付記〕

本稿は、文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」(立命館大学)および平成23年度科研費(課題番号23820071)による研究成果の一部である。また本稿は、二〇二一年度近世京都小説研究会五月例会における口頭発表に基づいている。席上、ご教示を下された先生方、資料の掲載を許可下さった各機関に厚くお礼申し上げます。